

\* 秋かけていひしなが  
らもあらなくに木の葉  
ふりしくえにこそあり  
けれ(伊勢物語)  
經家 藤原重家子  
重政 加茂重保子、順  
德帝ノ頃ノ人  
○ 歸る山 歸る一歸山  
家房 藤原基房子、後  
白河帝ノ頃ノ人  
○ いぶきの嶺に生ふる  
|| さしも  
○ いぶき 伊吹一云ふ  
○ さしも 艾一然しも  
\* かくとだにえやはい  
ぶきのさしも草さしも  
知らじな燃ゆるおもひ  
を(後拾遺十一)  
○ 思ひ ひ一火  
○ たつた山 立つ一立  
田山  
○ 立田の：雲の|| ゆく  
へも知らぬ  
○ むなしき空 むなし  
|| 虚空

○ 夢のうち逢ふと見えつる寢覺こそつれなきよりも袖はぬれけれ  
五十首歌たてまつりし時 前大納言忠良  
たのめおきし浅茅が露に秋かけて木の葉ふりしく宿の通ひ路  
隔河忍戀といふ事を 正三位經家  
○ 忍びあまりあまの川瀬にことよせむせめては秋を忘れだにすな  
遠きさかひをまつ戀といへる心を 賀茂重政  
○ たのめてもはるけかるべき歸る山いくへの雲の下に待つらむ  
待 遠 戀カいふことをカ  
攝政太政大臣家百首歌合に 中宮大夫家房  
逢ふことはいつといぶきの嶺におふるさしも絶えせぬ思ひなりけり  
家隆朝臣  
ふじのねの煙も猶ぞ立ちのぼるうへなき物は思ひなりけり  
名立戀といふ心をよみ侍りける 權中納言俊忠  
無き名のみたつたの山にたつ雲のゆくへも知らぬながめをぞする  
百首歌中に戀の心を 惟明親王  
○ 逢ふ事のむなしき空のうき雲は身をしる雨のたよりなりけり

\* わが戀は行方も知ら  
ず果もなし逢ふを限り  
と思ふばかりぞ(古今  
十三)  
\* 月やあらぬ春や昔の  
春ならぬわが身一つは  
もとの身にして(古今  
十五)  
○ 結び・霜・氷  
\* 有明のつれなく見え  
し別より曉ばかりうき  
物はなし(古今十三)  
\* 大方は月をもめでじ  
これぞこのつめれば人  
の老いとなるもの(古  
今十七)

我が戀は逢ふをかぎりのたのみだにゆくへも知らぬ空のうき雲  
水無瀬戀十五首歌合に春戀の心を 皇太后宮大夫俊成女  
面影のかすめる月ぞやどりける春やむかしの袖の涙に 定家朝臣  
冬戀  
床の霜枕の氷きえわびぬむすびもおかぬ人の契りに 有家朝臣  
攝政太政大臣家百首歌合に曉戀  
つれなさのたぐひまでやはつらからぬ月をもめでじ有明の空  
宇治にて夜戀といふことをのこどもつか 藤原秀能  
うまつりしに 越前  
袖のうへに誰ゆる月はやどるぞとよそになしても人のとへかし  
久戀といへることを 前  
夏引の手びきの糸の年へてもたえぬ思ひにむすぼほれつつ  
家に百首歌合し侍りけるに祈戀といへる心 攝政太政大臣



\*物思へば深の螢もわが身よりあくがれいづるたまかとぞ見る(後拾遺廿)  
\*奥山にたぎりておつる瀧つ瀬の玉ちるばかり物な思ひそ(同前)  
○きふね 來一貴船川(山城國愛宕郡)

\*命やは何そは露のあだものを逢ふにし代へば惜しからなく(古今十二)

\*如何にしてしはし忘れむ命だにあらば逢ふ夜のありもこそすれ(拾遺十一)

○空蟬 憂一うつ蟬

○ありあけ 有り一有明  
○つき 月一盡き

いく夜われ浪にしをれてきふね川袖に玉ちる物おもふらむ

定家朝臣

年もへぬいのる契りははつ瀬山をへの鐘のよその夕暮

かた思ひのころをよめる

皇太后宮大夫俊成

うき身をば我れだにいとふいとへただそをだにおなじ心と思はむ

題しらず

權中納言長方

○戀ひ死なむおなじうき名をいかにして逢ふにかへつと人にいはれむ

殷富門院大輔

あす知らぬ命をぞおもふおのづからあらば逢ふよを待つにつけても

八條院高倉

つれもなき人の心はうつせみのむなしき戀に身をやかへてむ

西行法師

なにとなくさすがに惜しき命かなありへば人や思ひしるとて

思ひしる人ありあけの世なりせばつきせず身をば恨みざらまし

中關白 藤原道隆  
儀同三司母 内大臣藤原伊周母、高階成忠女  
○草枕 たび 旅一度  
○いつこの 何時この  
—何處の  
○思ふにはノ歌(伊勢物語)

\*命やは何そは露のあだものを逢ふにし代へば惜しからなく(古今十二)

廉義公 藤原實頼子、頼忠

○まつが枝の手向草 いくよ

○まつ 松一待つ

\*白波の濱松が枝の手向草幾世までにか年のへぬらむ(萬葉一)

新古今和歌集卷第十三

戀歌三

中關白かよひそめ侍りけるころ

儀同三司母

わすれじの行末まではかたければけふを限りの命ともがな

しのびたる女をかりそめなる所にゐてまかりて歸りてあしたに遣しける

謙徳公

限りなくむすびおきつる草枕いつこのたびを思ひわすれむ

題しらず

業平朝臣

思ふには忍ぶることぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

人の許にまかりそめて、あしたに遣しける

廉義公

昨日まで逢ふにしかへばと思ひしをけふは命の惜しくも有るかな

百首歌に

式子内親王

逢ふ事をけふまつが枝の手向草いくよしをるる袖とかはしる



○五節所の童 五節ノ  
舞姫ニ侍ル童女  
正清 醍醐帝皇子有家  
親王ノ御子

○うば玉の夢  
\*うば玉のやみのうつ  
つはさだかなる夢にい  
くらもかはらざりけり  
(古今十三)

\*知るといへば枕だに  
せでねしものを塵なら  
ぬ名の空にたつらむ  
(古今十三)

頭中將に侍りける時、五節所のわらはに物

申しそめて後尋ねて遣しける

源 正 清 朝 臣

戀ひしさにけぞ尋ぬる奥山の日影の露に袖はぬれつつ

題しらず

西 行 法 師

逢ふまでの命もがなと思ひしはくやしかりけるわが心かな

三條院女藏人左近

人心うす花染のかり衣さてだにあらで色やかはらむ

興 風

逢ひみてもかひなかりけりうば玉のはかなき夢におとるうつつは

實 方 朝 臣

中々の物思ひそめてねぬる夜ははかなき夢もえやは見えける

伊 勢

○夢とても人にかたるな知るといへば手枕ならぬ枕だにせず

題しらず

和 泉 式 部

○枕だに知らねばいはじ見しままに君かたるなよ春の夜の夢

○思ひ ひー火  
○なげき きー木

○あしの屋：かたむす  
びらうちとくる  
○解くる・帯

○ふしみ 臥し身一伏  
見  
○かかり 懸り一斯か  
り

○あき 秋一飽き  
○あけがたき 蓋の開  
け難き一夜の明け難き  
○ふたみ 蓋一二見  
○おきつ 起つー沖つ

人に物いひはじめて

馬 内 侍

わすれても人にかたるなうたたねの夢みて後もながからじ夜を

女につかはしける

藤 原 範 永 朝 臣

つらかりしおほくの年はわすられて一夜の夢をあはれとぞ見し

題しらず

高 倉 院 御 歌

○けさよりはいとど思ひをたきましてなげきこりつむあふ坂の山

初逢戀の心を

俊 頼 朝 臣

あしの屋のしづはた帯のかた結び心やすくもうちとくるかな

題しらず

よ み 人 し ら ず

かりそめにふしみの野べの草枕露かかりきと人にかたるな

人しれず忍びけることを文などちらすと聞

きける人につかはしける

相 模

いかにせむ葛のうら吹くあき風に下葉の露のかくれなき身を

題しらず

實 方 朝 臣

あけがたき二見の浦による波の袖のみぬれておきつ島人



敦道親王 冷泉帝皇子

近江更衣 源唱女、周子、醍醐帝更衣

○消・露・露  
○おきて 霞き―起き

○おき 同前

○おき 同前

逢ふ事のあけぬ夜ながらあけぬれば我れこそ歸れ心やは行く

九月十日あまりに夜マカふけて和泉式部が門を  
たたかせ侍りけるに聞きつけざりければあ

したに遣しける

伊 勢 太宰帥敦道親王

秋の夜の有明月の入るまでにやすらひかねて歸りにしかな

題しらず

道 信 朝 臣

○心にもあらぬ我が身の行きかへり道の空にて消えぬべきかな

近江更衣にたまはせける

延 喜 御 歌

はかなくもあけにけるかな朝露のおきての後ぞ消えまさりける

御返し

更 衣 源 周 子

朝露のおきつる空もおもほえず消えかへりつる心まよひに

題しらず

圓 融 院 御 歌

おきそふる露やいかなる露ならむ今は消えねと思ふ我が身を

謙 徳 公

○消・露・露

○うば玉の夜の衣を  
たちながら  
○たち 裁ち―立ち

女みこ 前齋院詔子内親王(大和物語参照)  
清蔭 源氏、陽成帝皇子

○大和物語「夜のみは」

\*曉のしぎの羽がきも  
もはがき君が来ぬ夜は  
我ぞ數かく(古今十五)

伊 勢

おもひ出でて今はけぬべし夜もすがらおきうかりつる菊の上の露うはせいこ(いうへの)

清 慎 公

○うば玉のよるの衣をたちながらかへる物とは今ぞしりぬる

夏の夜女の許にまかりて侍りけるに人しづ

まる程夜いたくふけて逢ひて侍りければよ

藤 原 清 正

短夜の残りすくなく更けゆけばかねて物うき曉めカコセの空

大 納 言 清 蔭

女みこに通ひそめてあしたに遣しける

明くといへばしづ心なき春の夜の夢とや君をよるのみは見むわれカ

やよひのころ夜もすがら物語してかへり侍

りにける人の今朝はいとど物おもはしきよ

和 泉 式 部

けさはしも歎きもすらむいたづらに春の夜ひとよ夢をだに見で

しるしもヤマしらず

赤 染 衛 門

心からしばしとつむ物からに鳴のはねがきつらき今朝かななかなればカ(イ物からに)



九條入道右大臣 藤原忠平子、師輔、村上帝ノ頃ノ人  
小八條の御息所 民部卿源昇女、村上帝ノ頃ノ人

忍びたる所より歸りてあしたに遣しける 九條右大臣  
○わびつつも君が心になふとて今朝も袂をほしぞわづらふ 〔入道〕

小八條御息所につかはしける 亭子院御歌

○手枕にかせる袂の露けさはあけぬとつぐる涙なりけり  
題しらず キマカ 藤原惟成

しばしまてまだ夜はふかし長月の有明の月は人まどふなり

前裁の露おきたるを、などか見ずなりにし 實方朝臣  
と申しける女に

おきて見ば袖のみぬれていとどしく草葉の玉のかずやまさらむ

二條院御時曉かへりなむとする戀といふこ カ 二條院讃岐

とを 西行法師

明けぬれどまだきぬぎぬになりやらで人の袖をもぬらしつるかな  
題しらず

おもかげの忘らるまじき別れかな名残りを人の月にとどめて 攝政太政大臣

後朝戀の心を

○たのむ 頼む 田の面

成助 賀茂成直子、後冷泉帝ノ頃ノ人

朝光 藤原兼通子、圓融帝ノ頃ノ人

○消え・露

○朝ぼらけおきつる霜の消えかへり

○置き・消え・霜

道經 藤原有佐子、白河帝ノ頃ノ人

\* 待つ宵のふけゆく鐘の響きけば歸るあしたの鳥は物かは：物かはと君がいひけむ鳥の音の今朝しもなどかかなしかるらむ：待たばこそ更けゆくかねもつらからめかへるあしたの鳥のねぞうき（平家物語卷五）  
知家 藤原顯家子

又もこむ秋をたのむの雁だにも鳴きてぞ歸る春の曙

女の許にまかりて後、例ならず侍りければ 賀茂成助  
・心ちのカマ

誰れゆきて君に告げまし道芝の露もろ共に消えなましかば

女のもとに物をだにいはいはむとてまかれりけ コ

るに、むなしく歸りてあしたに 左大將朝光

消えかへりあるかなきかの我が身かなうらみて歸るみちしばの露

三條關白女御入内のあしたに遣しける 花山院御歌

朝ぼらけおきつる霜のきえかへり暮待つほどの袖を見せばや

法性寺入道前關白太政大臣家歌合に 藤原道經

庭におふる夕かけ草の下露や暮を待つ間の涙なるらむ

題しらず 小侍從

待つよひに更け行く鐘のこゑ聞けばあかぬ別れの鳥は物かは のセイ

これも又ながき別れになりやせむ暮を待つべき命ならねば 藤原知家



○大井川みせきの水の  
|| わくらばに  
○わくらば わく―湧

○まつちの山 待つ―  
待乳山  
○いざよひ 十六夜―  
踏踏

有明はおもひ出あれや横雲のただよはれつるしのための空 西行法師

大井川みせきの水のわくらばに今日は頼めし暮にやはあらぬ 清原元輔

けふと契りける人のあるかととひ侍りけれ〔て〕コイセイマ ば よみ人しらず

夕暮に命かけたるかげろふの有りやあらずやとふもはかなし 西行法師人々に百首歌よませ侍りけるに 定家朝臣

あぢきなくつらき嵐のこゑもうしなど夕暮に待ち習ひけむ 戀歌とて 太上天皇

○たのめずば人をまつちの山なりとねなまし物をいざよひの月 水無瀬にて戀十五首歌合に夕戀といへる心 攝政太政大臣

なにゆゑと思ひもいれぬ夕べだに待ち出でし物を山の端の月 寄風戀 宮内卿

○まつ 松―待つ  
○音する 風の音する  
―訪づる

\*松風は色やみどりに  
吹きつらむ物思ふ人の  
身にぞしみぬる(後拾  
遺十七)

○ながら 無き―長等  
山(近江國滋賀郡)

○まつ 松―待つ  
\*今來むといひしはか  
りに長月の有明の月を  
待ちいづるかな(古今  
十四)

\*君來すば聞へも入ら  
じ濃紫わが元結に霜は  
置くとも(古今十四)  
\*入るかたはさやけか  
りける月影をうはの空  
にも待ちし宵かな(紫  
式部集)

聞くやいかにうはの空なる風だにもまつに音する習ひ有りとは

題しらず 西行法師

人は來で風の氣色もふけぬるにあはれに雁の音つれて行く

八條院高倉

○いかが吹く身にしむ色のかはるかなたのむる暮の松風のこゑ

鳴長明

○たのめおく人もながらの山にだにさ夜ふけぬればまつ風のこゑ

藤原秀能

いま來むとたのめしことを忘れずばこの夕暮の月や待つらむ

待戀といへる心を 式子内親王

君待つと聞へもいらぬ槓の戸にいたくな更けそ山の端の月

戀歌とてよめる 西行法師

たのめぬに君來やと待つよひの間のふけゆかてただ明けなましかば

定家朝臣

歸るさの物とや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月



○君來むとノ歌(伊勢物語)

○衣手にノ歌(萬葉十三)「あらしのふきて」

○たび 度一旅・草枕

○霜がれ 枯れ一離れ

○須磨の：鹽焼衣まどほ

\*須磨の登の鹽焼衣を

さを粗みまどほにあれ

や君が來まさぬ(古今十五)

○霧ふかき：わすれ水

||たえまがち

安法法師 源道詮子、

趁、圓融帝ノ頃ノ人

\*秋風の吹くにつけて

も間はぬかな萩の葉な

らば音はしてまし(中務集)

題しらず

君來むといひし夜ごとに過ぎぬればたのまぬ物の戀ひつつぞふるつこい ぬせ 丸磨

衣手に山おろし吹きて寒き夜を君來まさずば獨りかも寝む

左大將朝光久しくうおとづれ侍らで旅なる所

に來あひて枕のなければ草をむすびてした

るに

馬内侍

逢ふ事はこれや限りのたびならむ草の枕も霜がれにけり

天曆御時まどほにあれやと侍りければ

女御徽子女王

なれゆくはうき世なればや須磨のあまの鹽焼衣まどほなるらむ

あひて後あひがたき女に

坂上是則

霧ふかき秋の野なかの忘れ水たえまがちなる頃にも有るかな

三條院みこの宮と申しける時ひさしくとは

うコカ

せ給はざりければ

安法法師女

世のつねの秋風ならばをぎのはにそよと許りの音はしてましのせ

題しらず

中納言家持

○足引の山のかげ草結びおきて戀ひやわたらむ逢ふよしをなみ

延喜御歌

あづま路にかるてふ萱の亂れつつ束の間もなく戀やわたらむ

權中納言敦忠

むすび置きし袂だに見ぬ花薄かるともかれじ君しとかずば

源重之

○霜の上に今朝ふる雪のさむければ重ねて人をつらしとぞ思ふ

安法法師女

獨りふすあれたる宿の床の上にあはれいく夜の寢覺しつらひ

重之

○やましろの淀の若菰かりにきて袖ぬれぬとはかこたざらなむ

貫之

かけて思ふ人もなけれど夕さればおも影たえぬ玉かつらかな

宮づかへしける女をかたらひ侍りけるにや

○山城の：わか菰かかりにきて

○かり 刈り一假り

重之集「淀のこぼさを

：恨むべしやは」

\*人はいき思ひやすら

む玉かづら面影にのみ

いとど見えつつ(伊勢物語)



定文 平好風子、宇多  
帝ノ頃ノ人  
○ただす 糺す一糺の  
森(山城國愛宕郡)  
○かけつつ 櫻かけ一  
神かけ

むごとなきをよこの入りたちていふけしき  
を見て恨みけるを女あらがひければよみ侍  
りける

平 定 文

偽りをただすの森のゆふだすきかけつつちかへ我れをおもはば

人につかはしける

鳥 羽 院 御 歌

いかばかりうれしからましもろ共に戀ひらるる身もくるしかりせば

かた思ひの心を

入道前關白太政大臣

我ればかりつらきを忍ぶ人やあると今世にあらば思ひあはせよ

攝政太政大臣家百首歌合に契戀の心を

前大僧正慈圓

○ただたのめたとへば人の偽りをかさねてこそは又もうらみめ

女をうらみて今はまからじと申して後猶わ

すれがたくおぼえければ遣しける

左衛門督家通

つらしとはおもふ物からふし柴のしばしもこりぬ心なりけり

たのむる事侍りける女わづらふこと侍りけ

る意りて久我内大臣の許につかはしける

よみ人しらず

家通 藤原實道子  
○ふし柴のししばし  
○こりぬ 伐り一戀る  
\*かねてより思ひしこ  
とぞふし柴のふるばかり  
りなるなげきせむとは  
(千載十三)

久我大臣 源雅定子、  
雅通、六條帝ノ頃ノ人

定家朝臣母 藤原親忠  
女、俊成室

たのめこし言の葉ばかりとどめおきて淺茅が露とききなましかば

返し

久 我 内 大 臣

あはれにも誰れかは露を思はまし消えのこるべき我が身ならねば

題しらず

小 侍 從

つらきをも恨みぬ我にならふなよ憂き身を知らぬ人もこそあれ

殷富門院大輔

何かいとふよもながらへじさのみやは憂きにたへたる命なるべき

刑部卿頼輔

戀ひ死なむ命は猶も惜しきかなおなじ世にあるかひはなけれど

西 行 法 師

あはれとて人の心のなさけあれな數ならぬにはよらぬ歎きを  
身を知れば人のとがとは思はぬに恨みがほにもぬるる袖かな

女につかはしける

皇太后宮大夫俊成

よしさらば後の世とだにたのめ置けつらさにたへぬ身ともこそなれ

返し

藤原定家朝臣母



たのめおかむたださばかりを契りにてうき世の中の夢になしてよ

少將滋幹 大納言國經  
子  
○戀しきにノ歌(大和物語)  
\*わくらばに問ふ人あらばすまの浦に藻鹽たれつつわぶと答へよ(古今十八)  
惠子女王 醍醐帝皇子  
代明親王ノ御女

新古今和歌集卷第十四

戀歌 四

中將に侍りける時女につかはしける

清 慎

よひよひに君をあはれと思ひつつ人にはいはでねをのみぞなく

よみ人しらず

返し

君だにも思ひ出でけるよひよひに待つはいかなる心ちかはする

少將滋幹につかはしける

戀しさに死ぬる命をおもひ出でてとふ人あらばなしとこたへよ

うらむる事侍りて、さらにまうでこじとち

かごとして二日ばかりありて遣しける

謙 徳 公

わかれては昨日けふこそ隔てつれ千世しもへたる心ちのみする

返し

惠子女王 醍醐皇后宮母

昨日ともけふとも知らず今はとてわかれし程の心まどひに

よこい



入道攝政 藤原兼家、  
道綱父

道綱母 藤原倫寧女、  
兼家室、蜻蛉日記作者、  
冷泉帝ノ頃ノ人

陽明門院 後朱雀帝皇  
后、三條帝皇女、頼子  
内親王

○あやめ草いね

○ね 根い音

○何のあやめも思ひし  
づめられぬにえならぬ  
ねを引きかけ(源氏物  
語・帚木)

\*わがせこが来べき宵  
なりさがねの蜘蛛の  
おこなひこよひしるし  
も(允恭紀)

○後の宮 中宮定子、

藤原師輔女

○うらみ 恨みい裏  
見・葛

入道攝政ひさしくまうでこざりける頃びん

かきて出で侍りけるゆするつきの水いれな

がら侍りけるを見てコセ

右大將道綱母

絶えぬるか影だに見えばとふべきをかたみの水はみくさるにけり(マ無)

内にひさしく参り給はざりけるころ五月五

日後朱雀院の御返ごとに

陽明門院

かたがたに引きわかれつつあやめ草あらぬねをやはかけむと思ひし

題しらず

伊

勢

言の葉のうつろふだにもある物をいとど時雨のふりまさるらむ

やまさらカ

右大將道綱母

吹く風につけてもとはむさがにの通ひし道は空にたゆとも

後の宮ひさしく里におはしけるころ遣しけ

る

天曆御歌

○葛の葉にあらぬ我が身も秋風の吹くにつけつつ恨みつるかな

ひさしく参らざりける人に

延喜御歌

○かれ 枯れい離れ

○ふる 經るい降る

○玉ぼこの道

熙子 保明親王御女、

朱雀帝更衣

麗景殿女御 堀河右大

臣頼宗女、延子

霜さやぐ野べの草葉にあらねどもなどか人めのかれまさるらむ

御返し

よみ人しらず

あさぢ生ふる野べやかるらむ山がつの垣ほの草は色もかはらず

春になりて、と奏し侍りけるが、さもなかり

ければ内より、まだ年もかへらぬにや、との

【イ】コセ

たまはせたりける御返事をかへでの紅葉に

つけて

女御徽子女王

霞むらむ程をもしらず時雨れつつ過ぎにし秋の紅葉をぞ見る

御返し

天曆御歌

今こむとたのめつつふる言の葉ぞときはに見ゆる紅葉なりける

女御のしもに侍りけるに遣しける

朱雀院御歌

玉ぼこの道は遙かにあらねどもうたて雲るにまどふ頃かな

御返し

女御熙子女王

おもひやる心は空にある物をなどか雲井にあひみざるらむ

麗景殿女御まゐりて後雨ふり侍りける日梅



梅壺の女御 藤原教通  
女、生子

○青柳のいと  
いと糸一甚

○よられじ 寄られ  
燃られ糸

○なびく・そめて・糸

○みあれの日 御生れ  
の日ノ義、加茂神社ノ  
祭日、陰曆四月、中ノ  
申ノ日

○かれ 枯れ―離れ  
廣幡の御息所 中納言  
廣明女

○はつか 僅か―廿日

壺の女御に

後朱雀院御歌

春雨のふりしくころは青柳のいと亂れつつ人ぞ戀ひしき

御返し

女御藤原生子

青柳のいとみだれたる此のころは一すぢにしも思ひよられじ

又つかはしける

後朱雀院御歌

あをやぎの糸はかたがたなびくとも思ひそめてむ色はかはらじ

御返し

女御生子

浅緑ふかくもあらぬ青柳は色かはらじといかがたのまむ

はやう物申しける女に枯れたる葵をみあれ

の日つかはしける

實方朝臣

いにしへのあふひと人はとがむとも猶そのかみのけふぞ忘れぬ

返し

よみ人しらず

かれにけるあふひのみこそ悲しけれあはれと見ずや加茂のみづがき

ひろはたのみやす所に遣しける

天曆御歌

逢ふことをはつかに見えし月影のおぼろげにやはあはれとは思ふ

○さらしなや：有明の  
つきす

○つきす 月―遊き

○城捨山 信濃國更級  
郡

○なく 無く―泣く

\*わが心慰めかねつ更  
科や城捨山に照る月を  
見て(古今十七)

○おしあげがた 押し  
開け―明方

紫式部集「さやかなり  
けり：よはかな」

題しらず

伊勢

さらしなのをばすて山の有明のつきすも物を思ふ頃かな

中務

○いつとてもあはれとおもふをねぬる夜の月はおぼろげなくなくぞ見し

躬恒

○更級の山よりほかにてる月もなぐさめかねつ此のころの空

よみ人しらず

天の戸をおしあげがたの月見ればうき人しもぞ戀ひしかりける

○ほのみえし月を戀ひしと歸るさの雲路の浪にぬれてこしかな

紫式部

いるかたはさやかなりける月影をうはの空にも待ちしよひかな

返し

よみ人しらず

さして行く山の端もみななかきくもり心の空にきえし月影

藤原經衡

題しらず

今はとてわかれし程の月をだに涙にくれてながめやはせし



おも影のわすれぬ人によそへつつ入るをぞしたふ秋の夜の月  
肥 後

うき人の月はなにぞのゆかりぞと思ひながらもうちながめつつ  
後徳大寺左大臣

西行法師

月のみやうはの空なるかた見にて思ひもいでば心かよはむ  
くまもなきをりしも人を思ひいでて心と月をやつしつるかな

物おもひてながむるころの月の色にいかばかりなるあはれそふらむ

八條院高倉

くもれかしながらむるからにかなしきは月におぼゆる人のおもかけ

百首歌中に 太上天皇

○わすらるる身を知る袖のむら雨につれなく山の月は出でけり

千五百番歌合に 攝政太政大臣

めぐりあはむ限りはいつと知らねども月なへだてそよその浮き雲

○わが涙もとめて袖にやどれ月さりとて人の影は見ねども

えねどこせ

\*いま來むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出づるかな(古今十二)

宗圓 熊野別當、法眼  
辨宗子  
○まつ 松一待つ

權中納言公經

戀ひわたる涙や空にくもるらむ光もかはる閨の月かけ  
左衛門督通光

いくめぐり空行く月も隔て來ぬ契りしなかはよそのうき雲  
右衛門督通具

今こむと契りしことは夢ながら見し夜に似たる有明の月  
有家朝臣

わすれじといひしばかりの名残りとしてその夜の月はめぐりにけり  
攝政太政大臣

題しらず

おもひ出でてよなよな月に尋ねずば待てと契りし中やたえなむ  
家隆朝臣

忘るなよ今は心のかはるともなれしその夜の有明の月  
法眼宗圓

○そのままにまつ嵐もかはらぬを忘れやしぬるふけし夜の月  
かきカ(イ)けし  
藤原秀能



\*君をおきてあだし心  
たわがもたば末の松山  
浪も越えなむ(古今廿)

\*たのめつつ来ぬ夜あ  
またになりぬれば待た  
じと思ふぞ待つにまさ  
れる(拾遺十三)  
\*覆ねてもわれこそと  
はめ道もなく深き蓬の  
もとのころを(源氏  
物語・蓬生)

人ぞ憂きたのめぬ月はめぐり来て昔わすれぬ蓬生の宿

八月十五夜和歌所にて月前戀といふことを 攝政太政大臣

わくらばに待ちつる宵もふけにけりさやは契りし山の端の月

有家朝臣

來ぬ人を待つとはなくて待つよひのふけ行く空の月もうらめし

定家朝臣

松山と契りし人はつれなくて袖こす浪にのこる月かけ

皇太后宮太夫俊成女

千五百番歌合に

ならひこし誰が偽りもまだ知らで待つとせしまの庭の蓬生

二條院讃岐

經房卿家歌合に久戀を

跡絶えて淺茅が末になりにけりたのめし宿の庭の白露

寂蓮法師

攝政太政大臣家百首歌よみ侍りけるに

來ぬ人を思ひ絶えたる庭の面のよもぎが末ぞ待つにまされる

左衛門督通光

尋ねても袖にかくべきかたぞなきふかき蓬の露のかごとを

\*風吹けば峯に分るる  
白雲の絶えてつれなき  
君が心か(古今十二)

○かねごと 楚王巫山  
ノ神女ノ故事

藤原保季朝臣

○形見とてほのふみ分けし跡もなし來しは昔の庭の萩原  
法橋行遍

○名残りをば庭のあさぢにとどめ置きて誰ゆる君が住みうかれけむ  
定家朝臣

攝政太政大臣家百首歌合に

忘れずば馴れし袖もやこほるらむねぬ夜の床の霜のさ筵  
家隆朝臣

○風ふかば峯にわかれむ雲をだに有りしなごりの形見ともみよ  
攝政太政大臣

百首歌たてまつりし時

いはざりき今こむまでの空の雲月日隔てて物思へとは  
家隆朝臣

千五百番歌合に

おもひ出でよたがかねごとの末ならむ昨日の雲の跡の山風  
刑部卿範兼

二條院御時艶書の歌めしけるに

わすれ行く人ゆる空をながむればたえだえにこそ雲も見えけれ  
殷富門院大輔

題しらず



\*かきくらす心の闇に  
まどひにき夢うつつと  
は世人定めよ(古今十  
三)  
○おきし 置きー起き

○あき 秋ー飽き

忘れなばいけらお物かと思ひしにそれもかなはぬ此の世なりけり

西行法師

○うとくなる人をなにとて恨むらむ知らぬ折も有りしに  
今ぞしるおもひ出でよと契りしは忘れむとてのなさけなりけり

建仁元年三月歌合に逢不遇戀の心を 土御門内大臣

あひみしは昔がたりのうつつにてそのかねごとを夢になせとや

權中納言公經

○あはれなる心のやみのゆかりとも見し夜の夢を誰か定めむ

右衛門督通具

契りきやあかぬ別れに露おきし曉ばかりかたみなれとは

寂蓮法師

恨みわび待たじ今はの身なれども思ひなれにし夕暮の空

宜秋門院丹後

わすれじの言の葉いかになりにけむたのめし暮はあき風ぞ吹く

家に百首歌合し侍りけるに 攝政太政大臣

○うらみ 恨みー裏見  
\*我が背子が衣の裾を  
吹きかへしうらめづら  
しき秋の初風(古今四)

○ゆふまぐれ いふー  
ゆふ

\*來ぬ人を待つたぐれの  
秋風は如何に吹けば  
か侘しかるらむ(古今  
十五)

思ひかねうちぬる宵も有りなまし吹きだにすさべ庭の松かぜ

有家朝臣

さらでだに恨みむとおもふわぎも子が衣のすそに秋風ぞ吹く

よみ人しらず

題しらず

心にはいつも秋なる寢覺かな身にしむ風のいく夜ともなく

西行法師

あはれととふ人のなどなかるらむ物思ふ宿の萩のうは風

俊恵法師

入道前關白太政大臣家歌合に

我が戀は今限りとゆふまぐれ萩ふく風の音づれて行く

式子内親王

題しらず

いまはただ心のほかにきく物を知らずがほなる萩の上風

攝政太政大臣

家歌合に

いつも聞く物とや人の思ふらむ來ぬ夕暮の秋風のこゑ

前大僧正慈圓

○心あらば吹かずもあらなむ宵々に人まつ宿の庭の松かぜ

秋カ(イ松)



\*手枕のすきまの風も  
寒かりき身はならはし  
のものにぞありける  
(拾遺十四)  
○尾上の宮(大和國高  
圓山)の||おのづから

\*よひよひに枕定めむ  
方もなし如何にねし夜  
か夢に見えけむ(古今  
十一)  
○ゆふは山 大和國

和歌所にて歌合し侍りしに逢不遇戀の心を

寂蓮法師

里はあれぬむなしき床のあたりまで身はならはしの秋風ぞ吹く

水無瀬の戀十五首歌合に

太上天皇

里はあれぬ尾上の宮のおのづから待ち來し宵も昔なりけり

有家朝臣

物おもはでただおほかたの露にだにぬるればぬるる秋の袂を

雅經

草枕むすびさだめむかた知らずならはぬ野べの夢の通ひ路

和歌所歌合に深山戀といふことを

家隆朝臣

さても猶とはれぬ秋のゆふは山雲吹く風も嶺に見ゆらむ

藤原秀能

思ひいるふかき心のたよりまで見しはそれともなき山路かな

題しらず

鴨長明

ながめてもあはれと思へおほかたの空だにかなし秋の夕暮

千五百番歌合に

右衛門督通具

○言の葉・うつり・秋

○あき 秋―飽き  
○こがらし 焦らす―  
木枯の杜(駿河國安倍  
郡)  
○六百番歌合「人の」  
○あき 秋―飽き  
○まつ 松―待つ  
○うらがれて 枯れ―  
離れ  
○あき 秋―飽き  
○消え・移る・色  
○かはら屋 變る―瓦  
屋  
\*わが心かはらむもの  
か瓦屋の下たく煙した  
むせびつつ(後拾遺十  
四)

○言の葉のうつりし秋も過ぎぬれば我が身時雨とふる涙かな

定家朝臣

消えわびぬうつろふ人のあきの色に身をこがらしの森の下露

攝政太政大臣家歌合に

寂蓮法師

來ぬ人をあきのけしきやふけぬらむ恨みによわるまつ蟲のこゑ

戀歌とてよみ侍りける

前大僧正慈圓

我が戀は庭のむら萩うらがれて人をも身をもあきの夕暮

被忘戀の心を

太上天皇

袖の露もあらぬ色にぞ消えかへるうつればかはる歎きせしまに

定家朝臣

むせぶとも知らじな心かはら屋に我のみ消たぬ下の煙は

家隆朝臣

知られじなおなじ袖にはかよふとも誰が夕暮とたのむ秋風

皇太后宮大夫俊成女

露はらふ寢覺は秋の昔にて見はてぬ夢にのこる面影

もカ(は)



\*わが庵は三輪の山も  
と戀しくばたづねて來  
ませ杉たてる門(古今  
十八)

\*色見えでうつろふも  
のは世の中の人の心の  
花にぞありける(古今  
十五)

○あかし 明すー明石  
\*ひとりねは君も知り  
きやつれづれと思ひあ  
かしのちらさびしさを  
(源氏物語・明石)

\*いせ島や潮干のかた  
にあさりてもいふかひ  
なきはうき身なりけり  
(源氏物語・須磨)

○かひ 效カヒ一貝  
○關もる 關守るー堰  
き洩る

\*秋かけていひしなが  
らもあらなくに木の葉  
ふりしくえにこそあり  
けれ(伊勢物語)

攝政太政大臣家百首歌合に尋戀

前大僧正慈圓

心こそゆくへも知らねみわの山杉のこずゑ「の心を」セイの夕暮の空

百首歌中に

式子内親干

さりととも待ちし月日ぞうつりゆく心の花の色にまかせて

いきてよもあすまで人ももコつらからじ此の夕暮をとほばとへかし

曉戀の心を

前大僧正慈圓

あかつきの涙や空にたぐふらむ袖におちくる鐘の音かな

千五百番歌合に

權中納言公經

○つくづくと思ひあかしの浦千鳥浪の枕になくなくぞきく

尋ねみるつらき心のおくの海よ汐干のかたのいふかひもなし

定家朝臣

水無瀬戀十五首歌合に

雅經

見し人のおも影とめよ清見がた袖に關もる浪のかよひ路

皇太后宮大夫俊成女

ふりにけり時雨は袖に秋かけていひしばかりを待つとせしまに

○かれがれ 枯れー離  
れ

かよひこし宿の道しばかれがれに跡なき霜のむすぼほれつつ



新古今和歌集卷第十五

戀歌五

水無瀬戀十五首歌合に

藤原定家朝臣

白妙の袖の別れに露おちて身にしむ色の秋風ぞ吹く

藤原家隆朝臣

思ひいる身はふか草の秋の露たのめし末や木枯の風

前大僧正慈圓

野邊の露は色もなくてやこぼれつる袖より過ぐる萩の上風

左近中將公衡

題しらず

戀ひわびて野べの露とは消えぬとも誰れか草葉をあはれとは見む

右衛門督通具

とへかした尾花が本の思草しをるる野べの露はいかにと

權中納言俊忠

家に戀十首歌よみ侍りける時

〔五〕カ、コセ(共ニイ十首)〔七〕カコ

\*白妙の袖の別れはたしけども思ひみだれてゆるしつるかも(萬葉十二)

\*吹きくれば身にもしみける秋風を色なきものと思ひけるかな(古今六帖一)

\*道のべの尾花がもとの思草いまさらさらになんか思はむ(萬葉十)

○消ゆ・おく・露・霜

夜の間にも消ゆべき物を露霜のいかに忍べとたのめおくらむ

道信朝臣

題しらず

あだなりと思ひしかども君よりは物わすれせぬ袖のうは露

藤原元眞

○元眞集「なりななむ

のためて侍りける女コマの後は返りごとをだ

の葉も見じなしカ

：みじ

○露・消え・草

にせず侍りければ、かのをとこにかはりて

和泉式部

○かれ 枯れ・離れ

今こむといふことの葉もかれ行くに夜な夜な露のなにに置くらむ

たのめたる事跡なくなり侍りにける女の久

藤原長能

○葉・露・消え

あだことの葉におく露霜コカかれカの消えにしをある物とてや人のとふらむ

よみ人しらず

薬原惟成につかはしける

うちはへていやは寝らるる宮城野のこ萩が下葉色に出でしより

藤原惟成

返し

○宮城野 陸前國宮城郡  
○宮城野の：下葉色に出づ

○萩の葉や露の氣色もうちつけに本よりかはる心ある物を



○消え・露

\*愚なる涙ぞ袖に干は  
なすわれはせきあへず  
籠つ瀬なれば(古今十  
二)

○安達 岩城郡安達郡  
六條右大臣室 源顯房  
室、隆房女

\*身に近く秋や来ぬら  
む見るままに青葉の山  
もうつろひにけり(源  
氏物語・若紫)

\*秋萩の下葉うつけて  
目にちかくよそなる人  
の心をぞみる(拾遺十  
七)

\*稻妻はかげろふばか  
りありし時秋のたのみ  
は人しりにけり(古今  
六帖一)

題しらず

花山院御歌

よもすがら消えかへりつる我が身かな涙の露にむすぼほれつつ

ひさしくまらぬ人に

光孝天皇御歌

○君がせぬ我が手枕は草なれや涙の露のよなよなぞ置く

御返し

よみ人しらず

○露ばかりおくらむ袖はたのまれず涙の川の瀧つ瀬なれば

みちのくにの安達に侍りける女に九月許り

に遣しける

六條右大臣室

思ひよるよそのむら雲時雨れつつあだちの原に紅葉しぬらむ

おもふ事侍りける秋の夕暮ひとりながめて

よみ侍りける

相模

身にちかく来にける物を色かはる秋をばよそに思ひしかども

題しらず

謙徳公

色かはる萩の下葉を見ても先づ人の心の秋ぞ知らるる

いな妻はてらさぬ宵もなかりけりいづらほのかに見てしかげろふ

○ふりみちて・時雨

○あまの釣竿の長き

\*涙川水まさればや敷  
妙の枕の浮きとまら  
ざるらむ(拾遺十九)

○おもほえずノ歌(伊  
勢物語)

○いもが袖ノ歌(萬葉  
十一)

○白妙の衣  
○なみ 浪―無み  
○ね 音―根  
○なかる 泣かる―流  
○忘るらむノ歌・憂き  
ながらノ歌(伊勢物語)

○清正集「憂き身のた  
めは」  
○いづかたにノ歌(拾  
遺十五)

人しれぬ寢覺の涙ふりみちてさも時雨れつる夜半の空かな

光孝天皇御歌

涙のみうき出づるあまの釣竿の長き夜すがら戀ひつつぞぬる

坂上是則

○枕のみうくと思ひし涙川今は我が身のしづむなりけり

よみ人しらず

おもほえず袖に溲のさわぐかなもろこし舟のよりしばかりに

いもが袖わかれし日より白妙の衣かたしき戀ひつつぞぬる

○逢ふことのなみの下草みがくれてしづ心なくねこそなかるれ

浦にたく藻鹽の煙なびかめやよものかたより風はふくとも

忘るらむとおもふ心のうたがひに有りしよりけにものぞかなしき

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつなほぞ戀ひしき

命をばあだなる物と聞きしかどつらきがためはながくも有るかな(マ無)

○いづかたに行きかくれなむ世の中に身のあればこそ人もつらけれ



○今までにノ歌・山城  
のノ歌(伊勢物語)  
○山城・汲みていたの  
みし

○君があたりノ歌・中  
空にノ歌(伊勢物語)  
○萬葉十二見つつも  
：雲なたなびき  
○伊勢物語「中空に  
なりにけるかな」  
○雲のゐる遠山鳥の  
よそに  
○ひるは来て：山鳥の  
影みる時  
○我もノ歌(大和物語)  
○しか 然かー鹿

\*夏野ゆくを鹿の角の  
つかの間も妹が心を忘  
れて思へや(萬葉四)  
○夏野ゆく：角のつ  
かのま  
\*夏草のつゆわけ衣き  
せなくにわが衣手のひ  
る時もなき(萬葉十)  
八代女王 父祖未詳  
○ならの小川 山城國  
愛宕郡  
○うらみ 浦見一恨み

山口女王 父祖未詳、  
奈良朝ノ人  
○あし邊よりノ歌(萬  
葉四)  
○鹽竈のノ歌(古今六  
帖三)  
○鹽竈の：浮島のう  
きて  
\*宵々に枕定めむ方も  
なしいかにねし夜か夢  
に見えけむ(古今十二)

盛明親王 醍醐天皇子

○今までに忘れぬ人は世にもあらしおのがさまさま年の経ぬれば  
玉水を手に結びても心みむぬるくは石のなかもたのまじ  
やましるの井手の玉水手にくみてたのみしかひもなき世なりけり  
○君があたり見つつををらむ伊駒山雲なくしそ雨はふるとも  
中空に立ちゐる雲の跡もなく身のはかなくもなりぬべきかな  
雲のゐる遠山鳥のよそにても有りとし聞けばわびつつぞぬる  
ひるは来てよるは別るる山鳥の影みる時ぞねはなけれける  
我もしか鳴きてぞ人に戀ひられし今こそよそに聲をのみきけ

人

磨丸

夏野行くを鹿の角のつかの間も忘れずおもへ妹が心を  
夏草の露分け衣きもせぬになど我が袖のかわく時なき  
みそぎするならの小川の川風に祈りぞわたる下にたえじと  
恨みつつぬる夜の袖のかわかぬに枕のしたに汐やみつらむ  
清原深養父  
あるカ(みつ)  
うみカ(しほ)

中納言家持につかはしける  
山口女王  
あし邊よりみち来る汐のいやましに思ふか君が忘れかねつる  
○鹽竈のまへにうきたる浮島のうきて思ひのある世なりけり  
赤染衛門  
題しらず

いかにねて見えしなるらむうたたねの夢より後は物をこそ思へ  
うちとけてねぬ物ゆゑに夢を見て物思ひまさる頃にも有るかな  
伊勢  
参議 篁

春の夜の夢にありつと見えつれば思ひ絶えにし人ぞ待たるる  
盛明親王  
○春の夜の夢のしるしはつらくとも見しばかりだにあらばたのまむ  
女御徽子女王

ぬる夢にうつつのうさも忘られて思ひなくさむ程ぞはかなき  
春の夜女のもとにまかりて朝につかはしけ  
能宣朝臣

〔大中臣〕カ



○なごり・川

\*秋の夜も名のみなり  
けり逢ふといへばこと  
ぞともなく明けぬるも  
のを(古今十三)  
○十月蟋蟀入我床下  
(詩經)  
○歌合千百四十五番  
「俊成」

かくばかりねであかしつる春の夜にいかに見えつる夢にか有りけむ  
題しらず のこいせい 寂蓮らせま法師

涙川身もうきぬべき寢覺かなはかなき夢のなごりばかりに  
百首歌たてまつりしに 家隆朝臣

逢ふと見てことぞともなくあけにけりはかなの夢の忘れがたみや  
題しらず ぬなこいせい 基 俊

ゆかちかしあなかま夜半のきりぎりす夢にも人の見えもこそすれ  
千五百番歌合に くこそ共ニイし 皇太后宮大夫俊成 〔女〕カ

あはれなりうたたねにのみ見し夢のながき思ひにむすほはれなむ  
題しらず 定家朝臣 るらカ

○かきやりしその黒髪のすぢごとらうちふす程はおも影ぞ立つ  
和歌所歌合に遇不逢戀の心を 皇太后宮大夫俊成女

夢かとお見しおも影も契りしも忘れずながらうつつならねば  
戀歌とて 式子内親王

はかなくぞ知らぬ命を歎きこし我がかねごとのかかりける世に はコ

辨 父祖未詳

○よどむ・水

\*假りにても心をかへ  
てましかば今はのどか  
になりもしなまし(馬  
内侍集)  
○次第司 祭ノ次第ヲ  
司ルモノ

仲文 藤原公葛子、圓  
融帝ノ頃ノ人

○過ぎにける世々の契りも忘れられていとふ憂き身のはてぞはかなき  
辨 皇太后宮大夫俊成

崇徳院に百首歌たてまつりける時、戀歌

○おもひわび見しおも影はさておきて戀せざりけむ折ぞ戀ひしき  
相 模

題しらず

ながれ出でむらき名にしばしよどむかな求めぬ袖の淵はあれども 氷らせいこい

をとこの久しく音づれざりけるが、忘れて 馬内侍

や、と申し侍りければよめる

つらからば戀ひしき事は忘れなでそへてはなどかしづ心なき

むかし見ける人、賀茂祭のしだいしに出で

立ちてなむまかりわたる、といひて侍りけ

れば

君しまれ道のゆききを定むらむ過ぎにし人をかつ忘れつつ

年ごろ絶え侍りにける女の、くれといふ物

尋ねたりけるつかはすとて 〔に〕カコ 藤原仲文



○朽木の袖 近江國甲賀郡

○くれ<sup>ト</sup>樽<sup>ト</sup>暮 經信母 藤原國盛女、源通方室、圓融帝ノ頃ノ人

教盛母 藤原家隆女、四條帝ノ頃ノ人

尾張 藤原定基女、崇徳帝中宮皇嘉門院ノ女房

花さかぬ朽木のそまの袖人のいかなるくれに思ひいづらむ

久しく音せぬ人に

大納言 經信母

おのづからさこそはあれと思ふ間にまことに人のとはずなりぬるツカ

忠盛朝臣かれがれになりて後いかが思ひけむ、久しく音づれぬことを恨めしくや、など

いひて侍りければ返事に

前中納言 教盛母

ならばねば人のとはぬもつらからでくやしきにこそ袖はぬれけれツカ

題しらず

皇嘉門院 尾張

なげかじな思へば人につらかりし此の世ながらのむくいなりけり

和泉式部

いかにしていかにこの世にありへばかしばしも物を思はざるべき

深養父

うれしくば忘るることもありなましつらきぞながき形見なりける

素性法師

逢ふ事のかたみをだにも見てしがな人は絶ゆとも見つつしのばむエカコイセイ

○葛城や・岩橋の絶えにし

\*いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞくむ(古今十七)

○みののを山 美濃國

\*いでてこし跡だにいまだかはらじを誰がかよひぢと今はなるらむ(伊勢物語)

小野小町

我が身こそあらぬかとのみたどらるれとふべき人に忘れしより能宣朝臣

能宣朝臣

葛城や久米路にわたす岩橋の絶えにし中となりやはてなむ祭主輔親

祭主 輔親

今はとも思ひな絶えそ野中なる水のながれは行きて尋ねむ伊勢

伊勢

思ひいづやみののを山のひとつ松契りし事はいつも忘れず業平朝臣

業平朝臣

出でていにし跡だにいまだかはらぬに誰がかよひぢと今はなるらむ梅の花香をのみ袖にとどめおきて我が思ふ人は音づれもせぬ天曆御歌

天曆御歌

天の原そことも知らぬ大空におぼつかなさを歎きつるかな女御 徽子女王

女御 徽子女王

歎くらむ心を空に見てしがな立つ朝霧に身をやなさまし御返し

御返し



○ふる 經る一降る。  
ながめ  
○ながめ 長雨一眺め  
致平親王 村上帝皇子  
○しら雲の二出でたつ  
○しら雲 白一知らず  
○雲井より：行く二こ  
ゑほのかなる

○かり 假り一雁

○初雁の二はつかに

題しらず

光孝天皇御歌

逢はずしてふる頃ほひのあまたあれば遙けき空にながめをぞする

女のほかへまかるを聞きて

兵部卿致平親王

思ひやる心も空にしら雲の出でたつかたを知らせやはせし

たつか  
題しらず

躬 恒

雲井より遠山鳥のなきて行くこゑほのかなる戀もするかな

辨更衣ひさしくまゐらざりけるに給はせけ

延喜御歌

雲井なる雁だになきてくる秋になどは人の音づれもせぬ

齋宮女御春ころまかり出でて久しく参り侍

天曆御歌

春行きて秋までとやは思ひけむかりにはあらず契りし物を

題しらず

西宮前左大臣

初雁のはつかに聞きしことづても雲路に絶えてわぶる頃かな

五節のころ内にて見侍りける人に又の年つ

○小忌衣二なる  
○日かげの二かけて

\*道しらは攝みにも行  
かむ住の江の岸に生ふ  
てふ戀忘草(古今廿)

\*行く水に數かくより  
もはかなきは思はぬ人  
を思ふなりけり(古今  
十一)  
○そこ 底一其處

篁 小野岑守子、令義  
解撰者、淳和帝ノ頃ノ  
人

かはしける

藤原惟成

小忌衣去年ばかりこそなれざらめけふの日かげのかけてだにとへ

藤原元真

題しらず

住吉の戀わすれ草種たえてなき世にあへる我ぞかなしき

天曆御歌

りけむ

○水のうへのはかなき數もおもほえずふかき心しそこにとまれば

謙徳公

ひさしくなりにける人のもとへ

ながきよのつきぬ歎きのたえざらばなにに命をかへて忘れむ

權中納言敦忠

思ひこいせ  
題しらず

心にもまかせざりける命もてたのめもおかじ常ならぬ世を

藤原元真

世のうきも人のつらきも忍ぶるに戀ひしきにこそ思ひわびぬれ

参議 篁

しのびてかたらひける女のおや聞きていさ  
め侍りければ



\*いにしへの賤のをだ  
まき賤しきもよきも盛  
はありしものなり(古  
今十七)  
○白妙の袖のなれに

○萬葉十二「衣手のひ  
る時もなき」

○玉くしげあけ

○玉くしげノ歌(萬葉  
九)

\*秋の田の：風の<sub>ニ</sub>か  
たより

\*秋の田の穂向きの風  
のかたよりに君により  
ななこちたかりとも  
(萬葉二)

○大淀の松 伊勢國多  
喜郡

○うらみて 浦見恨  
○こりずま 懲りずま  
○須磨

○みるめ 海松見る

かすならばかたらましやは世の中にいとかなしきはしづのをだまき  
題しらず

藤原惟成

○人ならばおもふ心をいひてましよしやさこそはしづのをだまき

よみ人しらず

○我がよはひおとろへゆけば白妙の袖のなれにし君をしぞ思ふ

○今よりはあはじとすれや白妙の我が衣手のかわく時なき

玉くしげあけまく惜しきあた夜を衣手かれてひとりかも寝む  
逢ふ事をおぼつかなくて過ぐるかな草葉の露の置きかはるまで

○秋の田のほむけの風のかたよりにわれは物おもふつれなき物を

はし鷹の野守の鏡えてしがなおもひ思はずよそながら見む

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪かな

○しら浪は立ちさわぐともこりずまの浦のみるめはからむとぞ思ふ

○さして行くかたはみなとの浪たかみ恨みてかへるあまのつり舟

うらま(なみ)

○たつ 立つー裁つ  
衣

○船岡 山城國愛宕郡

一條左大臣 宇多帝皇  
子、敦實親王御子、源  
雅信

○引く・松

### 新古今和歌集卷第十六

#### 雜歌 上

入道前關白太政大臣家百首歌よませ侍りけ  
るに立春の心を

皇太后宮大夫俊成

年暮れし涙のつらら解けにけり苔の袖にも春やたつらむ

土御門内大臣家に山家残雪といふ心をよみ

藤原有家朝臣

侍りける

山陰やさらでは庭に跡もなし春ぞ來にける雪のむら消え

圓融院位さり給ひて後、船岡に子の日し給

ひけるにまゐりて朝にたてまつりける

一條左大臣

○あはれなり昔の人を思ふには昨日の野べにみゆきせましや

御返し

圓融院御歌

○引きかへて野べの氣色は見えしかど昔を戀ふる松はなかりき



月あかく侍りける夜袖のぬれたりけるを  
大僧正行尊

鶯を

谷ふかみ春の光の遅ければ雪のつつめるうぐひすのころ

菅贈太政大臣

梅

ふる雪に色まどはせる梅の花うぐひすのみやわきて忍ばむ

枇杷左大臣の大臣になりて侍りけるよろこ

び申すとて梅を折りて

貞信公

遅くとてつひに咲きぬる梅の花たが植ゑおきし種にか有るらむ

延長のころほひ五位藏人に侍りけるを、は

なれ侍りて朱雀院承平八年又かへりなりて

あくる年む月に御あそび侍りける日、梅の

花を折りてよみ侍りける

源公忠朝臣

百敷にかはらぬ物は梅の花折りてかざせるにはひなりけり

花山院御歌

梅の花をみたまひて

東三條院 圓融帝皇  
后、藤原兼家女、詮子

東三條入道前攝政太政  
大臣 藤原師輔子、兼  
家、花山帝ノ頃ノ人  
○かひ 效一峽

\*月やあらぬ春や昔の  
春ならぬわが身一つは  
もとの身にして(古今  
十五)

○堀河院 藤原兼通  
邸、京二條南堀川東  
閑院左大将 兼通子、  
朝光

色香をば思ひもいれず梅の花常ならぬ世によそへてぞ見る

上東門院世をそむき給ひにける春、庭の紅

梅を見侍りて

大貳三位

梅の花なにはほらむ見る人の色をも香をも忘れぬる世に

東三條院女御におはしける時、圓融院つね

にわたり給ひけるを聞き侍りて、ゆげひの

命婦が許につかはしける

東三條入道前攝政太政大臣

春霞たなびきわたるをりにこそかかる山べはかひもありけれ

圓融院御歌

御返し

○紫の雲にもあらで春がすみたなびく山のかひはなにぞも

菅贈太政大臣

柳を

道のべの朽木の柳春くればあはれ昔としのばれぞする

清原深養父

題しらず

○昔みし春はむかしの春ながら我が身ひとつのあらずも有るかな

堀河院におはしましけるころ閑院左大将の



○をり 折節一折り  
○高陽院、二條關白師  
通邸、中御門南堀川東  
○ふる 經る一降り  
二條關白内大臣 藤原  
師實子、師通、堀河帝  
ノ頃ノ人  
○ふり 舊り一降り  
\*花さそふあらしの庭  
の雪ならでふりゆくも  
のはわが身なりけり  
(新勅撰十六)  
○まりのかかり 蹴鞠  
ノ場所

家のさくらを折らせにつかはすとて 圓融院御歌  
○垣越しにみるあだ人の家櫻花ちるばかり行きて折らばや  
御返し

○をりにこと思ひやすらむ花櫻ありしみゆきの春を戀ひつつ 左大將朝光

高陽院にて花のちるを見てよみ侍りける 肥後

○萬代をふるにかひある宿なれやみゆきと見えて花ぞ散りける 後

かへし 二條關白内大臣

○枝ごとに末までにはふ花なれば散るもみゆきと見ゆるなるらむ

近衛司にて年久くなりて後、うへのをのこ

ども大内の花見にまかれりけるによめる 藤原定家朝臣

春をへてみゆきになるる花の陰ふり行く身をもあはれと思ふ

最勝寺のさくらは、まりのかかりにて久し

くなりしを、その木年ふりて風にたふれ

たるよし聞き侍りしかば、をのこどもにお

ほせて、こと木をその跡にうつし植ゑさせ

○しら川 知ら一白川  
○東鑑參照  
師光 源師頼子、堀河  
帝ノ頃ノ人

なれなれて見しはなごりの春ぞともなどしら川の花の下陰 藤原雅經朝臣  
建久六年東大寺供養に行幸の時、興福寺の

八重櫻さかりなりけるを見て枝に結びつけ

侍りける よみ人しらず

故郷と思ひなはてそ八重ざくらかかみゆきに逢ふ世有りけり

こもりゐて侍りけるころ後徳大寺左大臣白

河の花見にさそひければ、まかりてよみ侍

りける 源 師 光

いまや又月日のゆくも知らぬ身は花の春ともけふこそは見れ

敦道のみこのともに前大納言公任の白河の

家にまかりて又の日みこのつかはしける使

につけ申し侍りける 和 泉 式 部



○和泉式部集「見し山  
里の」

\*見ても又またも見ま  
くのほしければ馴るる  
を人は厭ふべらなり  
(古今十五)

京極前太政大臣 藤原  
師實

堀河左大臣 源師房子  
俊房、鳥羽帝ノ頃ノ人  
○新成櫻花 造花ノ櫻

忠家 藤原長家子、後  
宇多帝ノ頃ノ人

忠教 藤原師實子、伏  
見帝ノ頃ノ人

折る人のそれなるからにあぢきなく見し我が宿の花の香ぞする  
題しらず

藤原高光

○見ても又またもみまくのほしかりし花の盛りは過ぎやしぬらむ

京極前太政大臣家に白河院みゆきし給ひて

又の日花の歌たてまつられけるによみ侍り  
ける

堀河右大臣

○老いにけるしらがも花ももろ共にけふのみゆきに雪と見えけり

後冷泉院御時御まへにて甞新成櫻花といへ

る心を、をのこどもつかうまつりけるに

大納言忠家

櫻花をりて見しにもかはらぬに散らぬばかりぞしるしなりける

大納言經信

さもあらばあれ暮れ行く春も雲のうへに散ることしらぬ花しにほはば  
無風散花といふことをよめる

大納言忠教

さくら花過ぎゆく春の友とてや風の音せぬ世にも散るらむ  
鳥羽殿にて花のちりがたなるを御覽じて後

三條内大臣にたまはせける

鳥羽院御歌

○惜しめどもつねならぬ世の花なれば今はこのみを西にもとめむ

世をのがれて後、百首歌よみ侍りけるに花

皇太后宮大夫俊成

いまは我れよし野の花をこそやどの物とも見るべかりけれ

入道前關白太政大臣家歌合に

春くれば猶この世こそしのばるれいつかはかかる花を見るべき

おなじ家百首歌に

てる月も雲のよそにぞ行きめぐる花ぞ此の世の光なりける

前大僧正慈圓

見せばやな志賀のからさき麓なるながらの山の春のけしきを

題しらず

柴の戸に匂はむ花はさもあらばあれながめてけりなうらめしの身や

西行法師

世の中を思へばなべてちる花の我が身はさてもいづちかもせむ

はカ

○このみ 木の實―此  
の身

\*み吉野の山のあなた  
に宿もがな世の憂き時  
のかくれ家にせむ(古  
今十八)

○大乘院 大和國添上  
郡

\*心あらむ人に見せば  
や津の國のなにはあた  
りの春のけしきを(後  
拾遺一)



○さくらあさの浦波  
立ちかへり  
\* 孛生の浦に片枝さし  
おほひなる梨のなりも  
ならずもねて語らはむ  
(古今廿)  
\* 君をおきてあだし心  
をわがもたば末の松山  
波も越えなむ(古今廿)  
\* 九けくまの松は二木  
を都人いかにと問はば  
みきと答へむ(後拾遺  
十八)

東山に花見にまかり侍るとて、これかれさ  
そひけるを、さしあふ事ありてとどまりて  
申しつかはしける

安 法 法 師

題しらず

俊 頼 朝 臣

さくらあさのをふの浦なみ立ちかへり見れどもあかず山なしの花  
橋爲仲朝臣みちのおくに侍りける時、歌あ  
またつかはしける中に  
ぬこいせい

加 賀 左 衛 門

○白浪のこゆらむ末の松山は花とや見ゆる春の夜の月

題しらず

法 印 幸 清

○世をいとふよし野の奥のよぶこ鳥ふかき心の程や知るらむ

百首歌たてまつりし時

前 大 納 言 忠 良

をりにあへばこれもさすがにあはれなり小田のかはづの夕暮のこゑ

有 家 朝 臣

千五百番歌合に

春の雨のあまねき御代をたのむかな霜にかれ行く草葉もらすな

崇徳院にて林下春雨といふことをつかうま

八 條 前 太 政 大 臣

つりけるに

マセイ

○すべらぎの木高きかげにかくれても猶春雨にぬれむとぞ思ふ

圓融院位さり給ひて後、實方朝臣、馬命婦と  
〔小〕セイ

物がたりし侍りける所に山吹の花を屏風の  
時セイイ所

實 方 朝 臣

うへよりなげこし給ひて侍りければ  
ふせ

八重ながら色もかはらぬ山吹のなど九重に咲かずなりにし  
はせ

圓 融 院 御 歌

御返し

九重にあらで八重さく山吹のいはぬ色をば知る人もなし

前 大 僧 正 慈 圓

五十首歌たてまつりし時

おのが浪におなじ末葉ぞしをれぬる藤咲く田子のうらめしの身や

世をのがれて後、四月一日上東門院太皇太

后宮と申しける時、衣がへの御装束たてま

法成寺入道前攝政太政大臣

つるとて

八條前太政大臣 藤原  
實子、實行、後白河帝  
ノ頃ノ人  
○永觀二年八月廿七日

○うらめし 浦一恨め  
し



○たち 裁ち―断ち

○使少將 祭使ノ近衛少將

\*ちはやふる神代もきかず立田川からくれなゐに水くくるとは(古今五)

○そのかみ その昔― 神山(加茂ノ山)

○あり明 有り―有明

唐衣花の袂にぬぎかへよわれこそ春の色はたちつれ

御返し

上 東 門 院

○から衣たちかはりぬる春の夜にいかでか花の色を見るべき

四月祭の日まで花ちりのこりて侍りける年  
その花を使少將のかざしに給ふ葉にかきつけ侍りける

紫 式 部

神代には有りもやしけむさくら花けふのかざしに折れるためしは  
いつきの昔をおもひいでて

式 子 内 親 王

郭公そのかみ山の旅衣ほのかたらひし空ぞわすれぬ

左衛門督家通中將枕に侍りける時、祭の使にてかんだちにとまりて侍りける曉、齋院の女房の中よりつかはしける

よ み 人 し ら ず

立ち出づるなごりあり明の月影にいとどかたらふほととぎすかな  
返し

左 衛 門 督 家 通

いく千世とかぎらぬ君が御代なれど猶惜しまるるけさの曙

○あやめ 文目―菖蒲

\*うちわたす遠方人に物申す我そのそに白くさけるは何の花ぞも

(古今十九旋頭歌)

○うちわたす―をちか

た

○さみだれ：雨そそぎ

||あまりになるまで

\*あづまのまのまのあまりの雨そそぎわれ立ちぬれぬその戸ひらかせ(俊馬樂・東屋)

唐衣花の袂にぬぎかへよわれこそ春の色はたちつれ

御返し

上 東 門 院

○から衣たちかはりぬる春の夜にいかでか花の色を見るべき

四月祭の日まで花ちりのこりて侍りける年  
その花を使少將のかざしに給ふ葉にかきつけ侍りける

紫 式 部

神代には有りもやしけむさくら花けふのかざしに折れるためしは  
いつきの昔をおもひいでて

式 子 内 親 王

郭公そのかみ山の旅衣ほのかたらひし空ぞわすれぬ

左衛門督家通中將枕に侍りける時、祭の使にてかんだちにとまりて侍りける曉、齋院の女房の中よりつかはしける

よ み 人 し ら ず

立ち出づるなごりあり明の月影にいとどかたらふほととぎすかな  
返し

左 衛 門 督 家 通

いく千世とかぎらぬ君が御代なれど猶惜しまるるけさの曙

三條院御時五月五日あやめのねを郭公のか

たにつくりて梅の枝にすゑて人のたてまつりて侍りけるを、これを題にて歌つかうまつれと仰せられければ

三 條 院 女 藏 人 左 近

梅が枝にをりたがへたるほととぎすこゑのあやめも誰かわくべき

五月ばかり物へまかりける道にいとしろく

くちなしの花の咲けりけるを、これはなにかセイコイカマの花ぞと人にとひ侍りけれど申さざりければ

小 辨

うちわたす遠かた人にこととへどこたへぬかたにしるき花かな

さみだれ空はれてあかかりけるにばコセカ(イ)ど

赤 染 衛 門

五月雨の空だにすめる月影に涙の雨は晴るる間もなし

述懐百首歌中に五月雨

皇 太 后 宮 大 夫 俊 成

さみだれはまの軒ばの雨そそぎあまりなるまでぬるる袖かな

題しらず山

花 山 院 御 歌



贈皇后宮 冷泉帝女  
御、藤原伊尹女、懷子  
義孝 伊尹子

○露・撫子

○思ひ ひー火

○袖のうら 袖の裏  
袖の浦(筑前國筑紫郡)  
有常 紀名虎子、文德  
帝ノ頃ノ人  
秋やくるノ歌(伊勢物  
語)

獨りぬる宿のそこ夏あさなあさな涙の露にぬれぬ日ぞなき

贈皇后宮にそひて春宮にさぶらひける時少

將義孝久しくまゐらざりけるに、なでしこ

の花につけてつかはしける

惠子 女王

よそへつつ見れど露だになぐさまずいかにかすべきなでしこの花

月あかく侍りける夜、人の螢をつつみてつ

かはしたりければ雨のふりけるに申しつか

はしける

和泉式部

思ひあらば今宵の空はとひてまし見えしや月の光なりけむ

題しらず

七條院大納言

思ひあれば露は袂にまがふかと秋の始を誰れにとはまし

后宮より内に扇たてまつり給ひけるに

中務

袖のうらの浪吹きかへす秋風に雲のうへまで涼しからなむ

業平朝臣の装束つかはして侍りけるに

紀有常朝臣

○秋やくる露やまがふと思ふまであるは涙のふるにぞ有りける

早くよりわらは友だちに侍りける人のとし

ごろへて行きあひたる、ほのかにて七月十

日の頃、月にきほひてかへり侍りければ

紫式部

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月影

みこの宮と申しける時、少納言藤原統理年

ごろなれつからまつりけるを世をそむきぬ

べきさまに思ひ立ちけるけしきを御覽じて

三條院御歌

月影の山の端分けてかくれなばそむくうき世を我やながめむ

題しらず

藤原爲時

○山の端を出でがてにする月待つとねぬ夜のいたくふけにけるかな

參議正光おぼる月夜は忍びて人の許にまか

れけるを見あらはしてつかはしける

伊勢大輔

○うき雲は立ちかくせどもひまもりて空行く月の見えもするかな

返し

參議正光

○浮雲にかくれてとこそ思ひしかねたくも月のひまもりにける

○めぐり・月

爲時 藤原惟正子、紫  
式部父、村上帝ノ頃ノ  
人

正光 藤原兼道子、二  
條帝ノ頃ノ人



靜賢 藤原通憲子、後  
三條帝ノ頃ノ人  
○あらしの山 有らじ  
嵐の山

\*世の中を何にたとへ  
むあさびらきこぎにし  
舟の跡なきごとし(萬  
葉三)  
○あり明 在り—有明  
○永治 崇徳帝年號

三井寺にまかりて日ごろ過ぎてかへらむと  
しけるになごりを惜しみてよみ侍りける 刑部卿範兼  
月をなど待たれのみすと思ひけむげに山の端は出でうかりけり  
山里にこもりゐて侍りけるを人のとひて侍  
りければ 法師 靜賢

○思ひ出づる人もあらしの山の端に獨りぞいりし有明の月  
八月十五夜和歌所にて、をのことも歌つか  
うまつり侍りしに 民部卿範光

○和歌の浦に家の風こそなけれども浪ふく色は月に見えけり  
和歌所歌合に湖上月明といふ事を 宜秋門院丹後  
夜もすがら浦こぐ舟は跡もなし月ぞのこれるしがのから崎  
題しらず 藤原盛方朝臣

○山の端に思ひもいらじ世の中はとてもかくてもあり明の月  
永治元年讓位ちかくなりて夜もすがら月を  
みてよみ侍りける 皇太后宮大夫俊成

○三代のむかしとは後  
鳥羽より三代以前高倉  
院の御事也(季吟註)  
○雲井 空—禁中

○躬恒集「あはと雲居  
に」  
○あはと あれはと—  
阿波門(鳴門)

忘れじよわするなどだにいひてまし雲井の月の心ありせば

崇徳院に百首歌たてまつりけるに  
いかにして袖に光のやどるらむ雲井の月は隔ててし身を  
文治のころほひ百首歌よみ侍りけるに懷舊  
歌とてよめる 左近中將公衡

心にはわするる時もなかりけりみ代のむかしの雲の上の月  
百首歌奉りし秋歌 二條院讚岐

昔見し雲井をめぐる秋の月今いくとせか袖にやどさむ  
月前述懷といへる心をよめる 藤原經通朝臣

○うき身世にながらへば猶おもひ出でよ袂に契る有明の月  
石山にまうで侍りて月を見てよめる 藤原長能  
都にも人や待つらむ石山の嶺にのこれる秋の夜の月  
題しらず 躬恒

○淡路にてあはと遙かに見し月のちかき今宵はところがらかも  
月のあかかりける夜あひ話らひける人の此



\*かくばかり惜しと思ふ夜を徒にねてあかすらむ人さへぞうき(古今四)

○まつ 待つーまつち山

\*今來むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出づるかな(古今十四)

○まつ 松ー待つ

のころの月は見るや、といへりければよめる

源 道 濟

いたづらにねてはあかせどもろ共に君が來ぬ夜の月は見ざりき

夜ふくるまでねられず侍りければ月の出づるをながめて

増 基 法師

○天の原はるかに獨りながむれば袂に月の出でにけるかな

能宣朝臣やまとの國まつちの山ちかく住みける女の許に夜ふけてまかりて逢はざりけるを恨み侍りければ

よみ人しらず

たのめこし人をまつちの山風にさ夜ふけかしば月も入りにき

百首歌たてまつりし時の端セコ

攝政太政大臣

月見ばといひしばかりの人は來でまきの戸たたたく庭のまつ風

五十首歌たてまつりしに山家月の心を

前大僧正慈圓

山里に月は見るやと人は來ず空行く風ぞ木の葉をもとふ

攝政太政大臣大將に侍りし時、月歌五十首

\*木の問よりもりくる月の影みれば心づくしの秋は來にけり(古今四)

○ひとりみ山 ひとり見ーみ山

○うき 憂きー浮き

猷圓 藤原降信子、後鳥羽帝ノ頃ノ人  
○明けがた 明けー明方

よませ侍りけるに

有明の月のゆくへをながめてぞ野寺の鐘は聞くべかりける

おなじき家歌合に山月の心をよめる

藤 原 業 清

○山の端を出でも松の木の間より心づくしの有明の月

和歌所歌合に深山曉月といふことを

鴨 長 明

夜もすがらひとりみ山のまきの葉にくもるもすめる有明の月

熊野にまうで侍りし時たてまつりし歌中に

藤 原 秀 能

○奥山の木の葉のおつる秋風にたえだえ嶺の月ぞのこれる

月すめばよものうき雲空に消えてみ山かくれを雲コイセイ行く嵐かなにカマコイセイ

山家の心をよみ侍りける

猷 圓 法 師

ながめわびぬ柴のあみ戸の明けがたに山の端ちかくのこる月影

題しらず

花 山 院 御 歌

曉の月見むとしも思はねど見し人ゆゑにながめられつつ

伊 勢 大 輔

○有署の月ばかりこそかよひけれ來る人なしの宿の庭にも



○もろ 漏るー守る

○めぐり・あふ・月

○影・月

○住みなれし人影もせぬ我が宿に有明の月のいく夜ともなく

家にて月照水といへる心を人々よみ侍りけ

るに

和泉式部  
大納言經信

住む人もあるかなきかの宿ならし葦間の月のもるにまかせて

秋の暮にやまひにしづみて世をのがれ侍り

にける又の年の秋九月十餘日、月くまなく

侍りけるによみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

思ひきや別れし秋にめぐり逢ひて又も此の世の月を見むとは

題しらず

こよひカ

西行法師

月を見て心うかれしいにしへの秋にもさらにめぐり逢ひぬる

よもすがら月こそ袖にやどりけれ昔の秋をおもひ出づれば

○月の色に心をきよく染めましや都を出でぬ我が身なりせば

ふかくカ(きよく)

にコイセイ

すつとならばうき世をいとふしるしあらむわれみは曇れ秋の夜の月

ぐるコイセイ

ガコセ

ふけにける我が身のかけを思ふまにはるかに月のかたふきにける

世コイセイ

リカコセ

覺性 鳥羽帝皇子、信法

光行 源光季子、順徳帝ノ頃ノ人

\*月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして(古今十五)

寂超 俗名、藤原爲經、爲忠子、高倉帝ノ頃ノ人

入道親王覺性

藤原道經

秋の夜の月に心をなぐさめてうき世に年のつもりぬるかな

五十首歌めししに

前大僧正慈圓

秋をへて月をながむる身となれり五十ぢの闇をなに歎くらむ

百首歌たてまつりしに

藤原隆信朝臣

ながめても六十ぢの秋は過ぎにけり思へばかなし山の端の月

題しらず

源光行

○心ある人のみ秋の月を見ば何をうき身の思ひ出にせむ

世コイセイ

二條院讚岐

身のうさを月やあらぬとながむれば昔ながらの影ぞもりくる

世をそむきなむと思ひたちけるころ月を見

てよめる

寂超法師

有明の月よりほかに誰れをかは山路の友と契りおくべき



山里にて月の夜都を思ふといへる心をよみ  
とふせ

大江嘉言

都なるあれたる宿にむなしくや月に尋ぬる人かへるらむ

なが月の有明のころ山里より式子内親王に  
セ

おくれりける

惟明親王

○思ひやれ何をしのぶとなけれども都おぼゆる有明の月

返し

式子内親王

○有明のおなじながめは君も問へ都のほかも秋の山ざと

春日社歌合に曉月の心を

攝政太政大臣

天の戸をおしあげがたの雲間より神代の月の影ぞのこれる

右大将 忠經

○雲をのみつらき物とてあかす夜の月よ梢にをちかたの山  
ヤコセカ

藤原保季朝臣

○入りやらで夜を惜しむ月のやすらひにはのほのあくる山の端ぞうき

月あかき夜、定家朝臣にあひて侍りけるに歌

\*今日わかれ明日はあふみと思へども夜や更けぬらむ袖のつゆけき  
(古今八)

○もる 守る―漏る  
忠盛 平清盛父、鳥羽帝ノ頃ノ人  
○もる 守る―漏る

\*八重葎しげれる宿の寂しさに人こそ見えぬ秋は來にけり(拾遺三)  
○すみ 住み―澄み

の道に心ざしふかき事はいつばかりよりの  
〔は〕コ  
事にか、とたづね侍りければ、わかく侍りし  
時、西行にひさしくあひともなひて聞きな  
らひ侍るよし申して、そのかみ申せし事な  
どかたり侍りてかへりてあしたにつかはし  
ける

法橋行遍

あやしくぞかへさは月のくもりにし昔がたりに夜やふけにけむ  
故郷月を  
ぬらせコ

寂超法師

ふる里の宿もる月にこととはむわれをば知るや昔すみきと

平忠盛朝臣

○すだきけむ昔の人は影たえて宿もる物は有明の月  
遍照寺の月を見て  
〔寺にて〕コセカ  
あひしりて侍りける人の許にまかりたりけ

るに、その人ほかに住みていたう荒れたる

宿に月のさしいりて侍りければ

前中納言匡房

八重葎しげれる宿は人もなしまばらに月の影ぞすみける



○ふぢ江の浦 播磨國  
明石郡

\*和歌の浦に汐みちく  
れば濁をなみあしべを  
さして濁なき渡る(萬  
葉六)  
○月の出しほ 月の出  
る―出汐

○切目宿 紀伊國日高  
郡、九十九王子ノ一

題しらず

かもめ居るふぢ江の浦の沖つ洲に夜舟いざよふ月のさやけさ

神祇伯顯仲

難波がた汐干にあさるあしたづも月かたふけばこゑの恨むる

俊惠法師

和歌所歌合に海邊月といふことを

前大僧正慈圓

和歌の浦に月の出しほのさすままによるなく鶴のこゑぞかなしき

定家朝臣

藻鹽くむ袖の月影おのづからよそにあかさぬ須磨の浦人

藤原秀能

○明石がた色なき人の袖を見よすずろに月もやどる物かは

能野にまうで侍りしついでに切目宿にて海

邊眺望といへる心ををのこどもつかうまつ

りしに

源具親

ながめよと思はでしもや歸るらむ月待つ波のあまの釣舟

八十におほくあまりて後、百首歌めししに

○まつ蟲 松蟲―待つ

○風そよぐ：小笹の  
かりのよ

○よ 節間―世

○露・篠

○ねざめ 根―麩

○忘れがたみ 忘れ難

み―忘形見

○葛の葉の―うらみ

○うらみ 恨み―裏見

允仲 祝成仲子

\*宮城野のもとあらの

小萩露を重み風を待つ

ごと君をこそ待て(古今  
今十四)

よみて奉りし

皇太后宮大夫俊成

しめおきて今やおもふ秋山の蓬がもとにまつ蟲のなく

千五百番歌合に

あれわたる秋の庭こそあはれなれまして消えなむ露の夕暮

題しらず

西行法師

雲かかる遠山ばたの秋されば思ひやるだにかなしき物を

五十首歌人々によませ侍りけるに述懐の心

懐舊カイ

をよみ侍りける

守覺法親王

風そよぐ篠の小ざさのかりのよを思ふねざめに露ぞこぼるる

寄風懷舊といふことを

左衛門督通光

淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜わすれぬ夢を吹くあらしかな

述懐カ(懷舊)

皇太后宮大夫俊成女

葛の葉のうらみにかへる夢の世を忘れがたみの野べの秋風

題しらず

祝部 允仲

白露はおきにけらしな宮城野の本あらのこ萩末たわむまで

光コイ



○山里に松垣のまなく

○はつか 廿日一羽束 (攝津國有馬郡)

法成寺入道前攝政太政大臣女郎花を折りて  
歌よむべきよし侍りければ

紫式部

をみなへしさかりの色を見るからに露のわきける身こそしらるれ

返し

法成寺入道前攝政太政大臣

しら露はわきてもおかし女郎花心がらにや色の染むらむ

題しらず

おかしコイ

曾禰好忠

山里に葛はひかかる松垣のひまなく物は秋ぞかなしき

秋の暮に身の老いぬることを歎きてよみ侍

りける

安法法師

もも年の秋のあらしは過ぐしきぬいづれの暮の露と消えなむ

頼綱朝臣津の國の羽束といふ所に侍りけ

る時つかはしける

前中納言匡房

○秋はつるはつかの山のさびしきに有明の月を誰と見るらむ

九月ばかりに、すすきを崇徳院に奉るとて

かマ

大藏卿行宗

よめる

\*秋の夜も名のみなり  
けり逢ふといへばこと  
ぞともなくあけぬるも  
のを(古今十三)

○林下集「かくぞ」

○あき 秋一飽き

○あらし 嵐一あらし

○林下集「音ぞ淋しき」

○うつるふ・花

○きく 菊一聞く

順 源學子、後撰撰者、  
和名類聚抄著者、村上  
帝ノ頃ノ人

○野の宮 齋宮(院)ノ  
齋戒ノ爲メ籠ラレル宮

○願集「あすはなる」

○くだくる・水

○戦々競々如く臨深  
淵(如く)覆薄氷(詩經)

\*峯の雪汀の水 みわ

けて君にぞまどふ道に  
まどはず(源氏物語・浮  
舟)

花すすき秋の末葉になりぬれば事どもなく露ぞこぼるる

山里に住み侍りけるころ嵐はげしきあした

前中納言顯長が許につかはしける

後徳大寺左大臣

夜半に吹く嵐につけて思ふかな都もかくや秋はさびしき

返し

前中納言顯長

世の中にあきはてぬれば都にも今はあらしの音のみぞする

清涼殿の庭に植ゑたる菊を位さり給ひて後

糸へりける

おぼし出でて

冷泉院御歌

うつろふは心のほかの秋なれば今はよそにぞきくのうへの露

長月のころ野宮に前栽植ゑけるに

源順

○たのもしな野の宮人の植うる花しぐるる月にあへずなるとも

題しらず

よみ人しらず

○山川の岩行く水も氷してひとりくだくる嶺の松風

百首歌たてまつりし時

土御門内大臣

朝ごとにみぎはに氷ふみ分けて君につかふる道ぞかしこき



○あふくま川 蓬ふ  
阿武隈川

○ふる里 降る里—古  
里

○なげき き—木

○佛名 十二月十九日  
ヨリ三日間、清涼殿ニ  
テ佛名ヲ唱ヘシムル儀  
式

最勝四天王院の障子にあふくま川かきたる  
所

藤原家隆朝臣  
カマ

君が代にあふくま川の埋木も氷のしたに春を待ちけり

元輔が昔住み侍りける家のかたはらに清少

納言住みけるころ雪いみじう降りて、へだ

ての垣もたふれて侍りければ申しつかはし

ける

赤染衛門  
カマ

跡もなく雪ふる里はあれにけりいづれ昔の垣根なるらむ

御なやみ重くならせ給ひて後、雪の朝に

後白河院御歌

○露の命消えなましかばかくばかりふる白雪をながめましやは

雪によせて述懐の心をよめる

皇太后宮大夫俊成

柚山や木ずゑにおもる雪折れにたへぬなげきの身をくだくかな

佛名のあした、けづり花を御覽じて

朱雀院御歌

時過ぎて霜にかれにし花なれどけふは昔の心ちこそすれ

花山院おりの給ひて又の年、佛名にけづり

〔御〕コセ

慈覺 壬生氏、圓仁、  
傳教大師弟子、仁明帝  
ノ頃ノ人

花につけて申し侍りける

前大納言公任

程もなくさめぬる夢のうちなれどそのよに似たる花の色かな

返し

御形宣旨

見し夢をいづれの世ぞと思ふ間にをりを忘れぬ花のかなし

題しらす

皇太后宮大夫俊成

老いぬとも又もあはむと行く年に涙の玉を手向けつるかな

慈覺大師

おほかたにすぐる月日をながめしは我が身に年のつもるなりけり



新古今和歌集卷第十七

雜歌中

朱鳥五年九月紀伊國行幸時

河鳥皇子

白浪のはま松（ヒ）マ枝の手向草（ヒ）マいく世までにか年の經ぬらむ

題しらず

式部卿宇合

山しろの岩田の小野の柞原見つつや君が山路越ゆらむ

在原業平朝臣

あしの屋のなだの鹽焼いとまなみつけの小櫛もささず來にけり

（マ）イの

よみ人しらず

しかのあまのしほやく煙風をいたみ立ちはのぼらで山にたなびく

貫

之

難波女の衣ほすとてかりてたく蘆火の煙たたぬ日ぞなき

○朱鳥 持統帝年號  
河原 子 天智帝皇子  
○白浪ノ歌(萬葉一)  
宇合 藤原不比等子、  
聖武帝ノ頃ノ人  
\*山しなの山田の小野  
のははを原見つつや君  
が御越ゆらむ(萬葉九)  
○岩田 山城國宇治郡  
\*志賀の海士はめかり  
鹽やき暇なみくしげの  
小櫛とりも見なくに  
(萬葉三)  
○あしの屋 攝津國武  
庫郡  
○しかのノ歌(萬葉七)  
○しか 筑前粕屋郡  
○古今六帖「須磨の  
浦の」

ながら 昔ながら一長  
柄(攝津國西成郡)

○春の日のながら

○ながら ながし一長

柄

○はし 端一橋

孝善 藤原貞孝子、堀  
河帝ノ頃ノ人  
○はるに 遙に一春に

\*住吉の松を秋風ふく  
からに聲うちそふる沖  
つ白波(古今七)

ながらの橋をよみ侍りける

忠

峯

年ふれば朽ちこそまされ橋柱むかしながらの名だにかはらで

惠慶法師

春の日のながらの濱に舟とめていづれかはしと問へどこたへぬ

後徳大寺左大臣

朽ちにけるながらの橋を來てみれば蘆の枯葉に秋風ぞ吹く

權中納言定頼

題しらず

おきつかぜ夜はに吹くらしなにはがた曉かけて浪ぞよすなる

藤原孝善

○すまの浦のなぎたるあさはめもはるに霞にまがふあまの釣舟

壬生忠見

天曆御時屏風歌

秋風の關吹きこゆる度ごと（ヒ）カにこゑうちそふるすまの浦なみ

前大僧正慈圓

五十首歌よみて奉りし（ヒ）カに

すまの關夢をとほさぬ浪の音を思ひもよらで宿をかりける

攝政太政大臣

和歌所歌合に關路秋風といふことを



○伊勢島 伊勢國  
○一志の浦 伊勢國一志郡  
○鈴・ふり・なり  
○おもひ 思ひ一火

御返し  
大貳三位  
住吉の松はまつともおもほえて君が千とせのかけぞ戀ひしき  
祝部成仲  
教長卿名所歌よませ侍りけるに  
うちよする浪のこゑにてしるきかな吹上の濱の秋の初風  
越前  
百首歌たてまつりし時、海邊歌  
○おきつ風夜さむになれやたこの浦のあまのもしほ火焼きまさるらむ  
家隆朝臣  
海邊霞といへる心をよみ侍りし  
見渡せば霞のうちもかすみけり煙たなびくしほがまの浦  
皇太后宮大夫俊成  
大神宮に奉りける百首歌中に若菜をよめる  
西行法師  
けふとてや磯菜つむらむ伊勢島やいちしの浦のあまの乙女子  
伊勢にまかりける時よめる  
前大僧正慈圓  
鈴鹿山うき世をよそにふりすてていかになりゆく我が身なるらむ  
題しらず  
世の中を心たかくもいとふかなふじのけぶりを我がおもひにて  
あづまのかたへ修行し侍りけるにふじの山身の

○あかし 明し一明石  
○水の江のよし野の宮 丹後國與謝郡カトイ  
○灘 攝津國武庫郡  
むすめの齋宮 村上帝  
皇女、親子内親王、御  
母、徽子女王  
○大淀の浦 伊勢國多氣郡  
○立つ浪かへらずば  
○すみよし 住みよし  
一住吉(攝津國)

人すまぬ不破の關屋の板びさしあれにし後はただ秋の風  
明石浦をよめる  
俊頼朝臣  
あまを舟とま吹きかへす浦風に獨りあかしの月をこそ見れ  
眺望の心を  
寂蓮法師  
わかを浦を松の葉ごしにながむれば梢によするあまの釣舟  
千五百番歌合に  
正三位季能  
みづの江のよし野の宮は神さびてよはひたけたる浦の松かせ  
海邊の心を  
藤原秀能  
○今さらに住みうしともいかがせむなだの鹽屋の夕暮の空  
むすめの齋王に具してくだり侍りて、おほ  
よどの浦にみそぎし侍るとて  
女御徽子女王  
おほよどの浦にたつなみかへらずば松のかはらぬ色を見ましや  
大貳三位さといいで侍りけるをきこしめし  
後冷泉院御歌  
待つ人は心ゆくともすみよしの里にとのみはおもはざらなむ



○ときはの山 山城國  
葛野郡

○さして 志して一鎖  
して

○すぎ 過ぎ一杉

をよめる

風になびく富士の煙の空にきえてゆくへもしらぬ我が思ひかな

西行法師

さ月のつごもりに富士の山の雪しろく降れ

るを見て

「よみ侍りける」

業平朝臣

○時しらぬ山はふじのねいつとてかかこのまだらに雪のふるらむ

題しらず

在原元方

春秋もしらぬときはの山里はすむ人さへやおもがはりせぬ

五十首歌たてまつりし時

前大僧正慈圓

花ならでただ柴の戸をさして思ふ心のおくもみよし野の山

題しらず

西行法師

吉野山やがて出でじとおもふ身を花ちりなばと人や待つらむ

藤原家衡朝臣

いとひても猶いとはしき世なりけりよし野の奥の秋の夕暮

千五百番歌合に

右衛門督通具

一すぢになれなばさてもすぎの庵によなよなかはる風の音かな

○まつ 松一待つ  
○鳥羽 山城國紀伊郡

\*山里は物の寂しき事  
こそあれ世のらきより  
は住みよかりけり(古  
今十八)

師氏 藤原忠平子、村  
上帝ノ頃ノ人  
○榮花物語参照  
○雜下「天曆御歌」如  
覺ノ歌参照  
○横川 叡山三塔ノ一  
如覺 高光ノ法名  
○おく山 置く一奥山

守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに閑居

の心をよめる

有家朝臣

○誰かはとおもひたえてもまつにのみ音づれて行く風はうらめし

鳥羽にて歌合し侍りしに山家嵐といふこと

宜秋門院丹後

やまざとは世のうきよりも住みわびぬ事の外なる嶺の嵐に

百首歌たてまつりしに

家隆朝臣

瀧の音松の嵐も馴れぬればうちぬる程の夢はみせけり

題しらず

寂然法師

事しげき世をのがれにしみ山べに嵐のかぜも心してふけ

少將高光横川にまかりて、かしらおろし侍

りけるに法服つかはすとて

權大納言師氏

おく山の苔の衣にくらべみよいづれか露のおきまさるとも

返し

如覺

しら露のあした夕べにおく山の苔の衣は風もさはらず



○大原野 山城國乙訓郡

○おほはらの里 多し  
—大原の里

○をしほの山 惜し—  
小鹽山(山城國乙訓郡)

○もり 漏り—守り

能宣朝臣大原野にまうでて侍りけるに山里

のいとあやしきに住むべくもあらぬさまな

る人の侍りければ、いづこわたりより住む

ぞ、なととひはべりければ 〔人〕カ

よみ人しらず

世の中をそむきにとては來しかども猶うき事はおほはらの里

返し

能宣朝臣

○身をばかつをしほの山と思ひつついかにさだめて人のいりけむ

ふかき山にすみ侍りけるひじりの許にたづ

ねまかりたりけるにいほりの戸をとちて人

も侍らざりければ歸るとてかきつけける カ、コセ(共ニイ有)

惠慶法師

苔のいほりさして來つれど君まさで歸るみ山の道の露けさ モカ、コセ(共ニイの)

草コイ庵コセカひじりのちに見て返し キカ、コセ(共ニイさ)

あれはてて風もさはらぬ苔の庵にわれはなくとも露はもりけむ 草セイコイ

題しらず

西行法師

山ふかくさこそ心はかよふともすまであはれをしらむ物かは ハセコ

○御歌かず知らず人の口にある中にも、山山の：人に知らせむ(壇鏡・おどろの下) ○まつ 松—待つ

\*住みわびぬ今は限りと山里に妻木こるべき宿求めてむ(後撰十五)

少將井尼 父祖未詳、鳥羽帝ノ頃ノ人

やまかげにすまぬ心はいかなれや惜しまれて入る月もある世に

山家送年といへる心をよみ侍りける 寂蓮法師

立ちいでてつま木をりこしかた岡のふかき山路となりにけるかな

住吉歌合に山を 〔社〕カ 太上天皇

おく山のおどろが下もふみ分けて道ある世ぞと人にしらせむ

百首歌たてまつりし時 二條院讚岐

ながらへて猶君が代をまつ山のまつとせしまに年ぞへにける

山家松といふことを 皇太后宮大夫俊成

今はとてつま木こるべきやどの松千世をば君と猶いのるかな

春日社歌合に松風といへることを 有家朝臣

われたがらおもふか物をとばかりに袖にしぐるる庭の松風

山寺に侍りける比 道命法師

世をそむく所とか聞くおく山は物おもふにぞいるべかりける

少將井尼、大原より出でたりと聞きて遣しけ 〔人〕カ 和泉式部



○すみがま 炭一住み  
○おほ原 多し一大原  
○歌き き一木

○かざしをる三輪  
\*古にありけむ人も我  
ごとや三輪の檜原にか  
ざし折りけむ拾遺八

\*わが庵は三輪の山本  
懸しくば訪らひ來ませ  
杉立てる門(古今十八)  
○をぐらの山 小略一  
小倉山

○栖霞寺 山城國葛野  
郡

○駒引の引きわけの  
使 昔毎年八月ノ駒引  
ノ時ノ歌馬ヲ院・東宮  
ナドニ引キ分ケル使  
\*嵯峨の山みゆき絶え  
にし芹河の千代の古道  
跡はありけり(後撰十  
五)  
○望月 信濃佐久郡

世をそむくかたはいづくもマイコイセイに有りぬべし大原山はすみよかりきや  
返し ココセ(共ニイク)

おもふ事おほ原山のすみがまはいとど歎きの數をこそつめ  
少 將 井 尼  
題しらず

誰すみてあはれしるらむ山里の雨ふりすさむ夕暮の空  
しをりせで猶山ふかく分けいらむうき事きかぬ所ぶコマカありやと  
西 行 法 師

かざしをる三輪のしげ山かき分けてあはれとぞ思ふ杉たてる門  
殷富門院大輔  
法輪寺にすみ侍りけるに人のまうできて暮

れぬとていそぎ侍りければ  
道 命 法 師

いつとなきをぐらの山のかげを見て暮れぬと人のいそくなるかな  
後白河院栖霞寺におはしましけるに駒ひき  
の引きわけの使にてまゐりけるに  
定 家 朝 臣

○嵯峨の山千世のふる道跡とめて又露分くる望月の駒  
なげくこと侍りける比  
知足院入道前關白太政大臣

東三條入道關白太政大  
臣 東三條入道攝政大  
臣(兼家)ニ同ジ

○かかるせ 斯かる時  
斯かる瀬

○もののふのノ歌(萬  
葉二)

○もののふのやそ一宇  
治川、氏一宇治

○布引の瀧 攝津國武  
庫郡

行平 在原氏、平城帝  
皇子阿保親王ノ御子

○なみだ 無み一涙  
いづれまれり

○伊勢物語「涙の玉と  
いづれまれり」

\*たちぬはぬ衣きし人  
もなきものをなに山姫  
の布さらすらむ(古今  
十七)

○久方の天

さほ川のながれ久しき身なれどもうき瀬世コセに逢ひて沈みぬるかな  
冬ころ大將はなれてなげく事侍りけるあく  
・(の)  
るとし右大臣になりて奏し侍りける 東三條入道前關白太政大臣  
かかるせも有りける物をうぢ川のたえぬばかりも歎きけるかな  
攝政カマ  
圓 融 院 御 歌  
御返し

むかしよりたえせぬ川の末なればよどむばかりを何歎くらむ  
人 磨  
題しらず

もののふのやそ宇治川の網代木にいざよふ浪のゆくへしらすも  
布引の瀧見にまかりて  
中 納 言 行 平  
我が世をばけふかあすかと待つかひのなみだの瀧世といつれたかけむ  
京極前太政大臣布引の瀧見にまかりて侍り  
たコカ

水上の空に見ゆるはしら雲の立つにまがへる布引の瀧  
有 家 朝 臣  
最勝四天王院障子に布引の瀧かきたる所  
〔藤原〕コセ

久かたの天つをとめが夏衣雲井にさらす布引の瀧



○天の川原 河内國北河内郡

\*天の川紅葉を橋に渡せばや七夕つめの秋をしもまつ(古今四)

○うき木 漢ノ張翳ガ武帝ノ使ニテ桂ニ乘リテ天満ノ源ヲ究メシニ孟津ニ至リテ織女ニ逢ヒテ歸リシト云フ故事

\*世の中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞ今日に瀬になる(古今十八)

あまの川をすぐとて

○昔きくあまのかはらを尋ね来て跡なき水をながむばかりぞ〔原〕

攝政太政大臣

題しらず

天の川かよふうき木にこととはむ紅葉の橋はちる〔藤原〕コセやちらずや

堀河院御時百首歌たてまつりけるに

まさの板も苔むすばかりなりにけり幾世へぬらむ瀬田の長橋かへぬるコイセイ

天曆御時屏風に國々の所の名をかかせ給ひ〔させ〕

中

定めなき名にはたてれどあすか川早くわたりし瀬にこそ有りけれ

務

題しらず

○山里に獨りながめておもふかな世にすむ人の心つよさをながコセ(共ニイツよ)

前大僧正慈圓

山ざとにうき世いとはむ友もがなくやしく過ぎしむかしかたらむ

西行法師

○山ざとは人こさせじと思はねどとはるる事てうとくなりゆく(へども)カ

前大僧正慈圓

○かかる 斯かる一懸る・露

○かかる

○音なし川 消息の無し一音無川(紀伊國東牟婁郡)

\*わくらばにとふ人あらばすまの浦に藻鹽たれつつわぶと答へよ(古今十八)

○まつ 松一待つ

草の庵をいとひても又いかがせむ露の命のかかるかぎりは

都をいでてひさしく修行し侍りけるに訪ふ

べき人のとはず侍りければ熊野より遣しける

大僧正行尊

わくらばになどかは人のとはざらむ音なし川にすむ身なりとも

あひしれりける人のくま野にこもり侍りけるに遣しける

安 法 法師

世をそむく山の南の松風に苔の衣や夜さむなるらむ

西行法師百首歌すすめてよませ侍りけるに〔藤原〕コセ

家 隆 朝 臣

○いつかわれ苔の袂に露おきてしらぬ山路の月をみるべき

式 子 内 親 王

百首歌たてまつりしに山家の心を

小 侍 從

しきみつむ山路の露にぬれにけり曉おきの墨染の袖

攝政太政大臣



\*君徳ぶ草にやつつる  
古里は松島の音ぞかな  
しかりける(古今四)  
重保 加茂重繼子、高  
倉帝ノ頃ノ人  
○なげき きー木  
○こる・薪

西日 源雅降子、後鳥  
羽帝ノ頃ノ人  
○西の迎へ 來迎引攝  
ノコト

○晋王質伐木、至三倍  
安部石室山、見三童子  
圍て碁、與三質、物一如三  
棗核、含之不飢、局  
未終、斧柯爛盡、既歸  
無復時人(述異記上)  
\*古里は見し事も非ず  
斧の柄の朽ちし所ぞ戀  
しかりける(古今十八)

わすれじの人だにとはぬ山路かなさくらは雪にふりかはれども

五十首歌たてまつりし時〔ト〕コイ  
○影やどす露のみしげくなりは〔ト〕コセ(イ時)てて草にやつるる故郷の月〔藤原〕コセ

俊恵法師身まかりて後としごろ遣しけるた

き木など弟子どもの許につかはすとて

煙たえてやく人もなき炭がまの跡のなげきを誰かみカこるらとコイセイ

老後つの國なる山寺にまかり籠りけるに寂〔ト〕コセカ  
蓮尋ねまかりて侍りけるに庵のさま住みあ〔れ〕コセカ

かしてあはれにみえ侍りけるを歸りて後と〔ら〕

ぶらひて侍りければ〔ト〕コセカ 西日法師

八十ぢあまり西のむかへを待ちかねてすみあらしたる柴の庵ぞ  
山家歌あまたよみ侍りけるに 前大僧正慈圓

○山里にとひくる人のことぐさは此のすまひこそうらやましけれ  
後白河院かくれさせ給ひて後、百首歌に 式子内親王

斧のえのくちし昔は遠けれどありしにもあらぬ世をもふるかな〔ト〕コイセイ

述懐百首歌よみ侍りけるに 皇太后宮大夫俊成

いかにせむ賤がそのふの奥の竹かきこもるともよの中ぞかし 祝部成仲

老の後むかしをおもひ出で侍りて 前大僧正慈圓

あけ暮はむかしをのみぞしのぶ草葉すゑの露に袖ぬらしつつ 西行法師

岡のべの里のあるじを尋ねれば人はこたへず山おろしの風

ふる畑のそばのたつ木にゐる鳩の友よぶこゑのすぎき夕暮立木カセ

山かつのかた岡かけてしむる野のさかひにたてる玉のを柳〔ト〕コイセイ(イツ)

しげき野をいく一むらに分けなしてさらにむかしを忍びかへさむ

むかし見し庭の小松に年ふりて嵐の音をこずゑにぞきく

三井寺やけて後すみ侍りける坊を思ひやり 大僧正行尊

てよめる 住みなれし我がふるさは此のごころやあさぢが原にうづらなくらむ 攝政太政大臣

百首歌よみ侍りけるに

○よ 世一節問・竹

○しのぶ草 忍ぶー忍  
草

○山家集「山がつの」

○三井寺 近江國滋賀  
郡



○殘月滿屋梁、猶疑見  
顔色(杜子美)

○かかれる露

○いそのかみふり

○わたる橋

\*わくらばに問ふ人あ  
らばすまの浦にもしほ  
たれつつわぶと答へよ  
(古今十八)

故郷はあさぢが末になりはてて月にのこれる人のおも影

〔題しらず〕

原コセ(共ニイ末)

カセ(イ無)

西 行 法 師

これや見し昔すみけむ宿ならむ蓬が露に月のかかれる

人のもとにまかりて、これかれ松のかげに

のこカ

おりみてあそびけるに

貫 之

○陰にとて立ちかくるれば唐衣ぬれぬ雨ふる松のこゑかな

齋院邊に、はやうあひ知れりける人をたづ

西

ね侍りけるに、すみれつみける女しらぬよ

くカ

し申しければよみ侍りける

〔侍り〕コセマ

能 因 法 師

○いそのかみふりにし人を尋ぬればあれたる宿にすみれつみけり

ぬしなき宿を

惠 慶 法 師

いにしへをおもひやりてぞ戀ひわたる荒れたる宿の苔の岩橋

守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに閑居

ぬカ

いしマカ

の心を

定 家 朝 臣

わくらばにとはれし人もむかしにてそれより庭の跡はたえにき

〔藤原〕コセ

○なげき きー木

○秋されば：たつた山  
|| 立ちても

\*秋されば雁とびこゆ  
る立田山たちもあて  
も君をしぞ思ふ(萬葉  
十)

○朝倉 筑前國朝倉郡

齊明帝行宮ノ在リシ處

○木の丸殿 黒木ノ御

所 本

\*あさくらや木の丸

殿にやわが居ればわが

をれば、わがをれば名

のりをしつち行くは

誰が子ぞゆく人やたれ

(神樂歌・朝倉)

物へまかりける道に山人あまた逢へりける

に見て

にコセ(共ニイへ)  
あコセ(共ニイカ)

赤 染 衛 門

なげきこる身は山ながら過ぐせかしうき世の中に何歸るらむ

人 磨

題しらず

○秋さればかり人こゆるたつた山立ちてもあても物をしぞ思ふ

天 智 天 皇 御 歌

○あさくらや木のまる殿に我がをれば名のりをしつち行くはたが子ぞ



新古今和歌集卷第十八

雑歌下

○足引山

足引のあせこなたかなたに道はあれど都へいざといふ人ぞなき  
菅贈太政大臣

日かカコこカコセ  
のコレ(共ニイモ)

あまの原あかねさし出づる光にはいづれの沼かさしのこるべき  
月え

月ごとにえなると思ひします鏡西の浦にもとまらざりけり  
雲

山わかれとび行く雲のかへりくる影みる時は猶たのまれぬ  
霧ゆくカ

霧立ちて照る日のもとは見えずとも身はまどはれじよるべ有りやと  
雪

○西の浦 左遷地ノ太宰府  
○天廻ニ玄鑿ニ雲將ニ舞、唯是西行不ニ左遷ニ(菅公詩)

○日のもと 日ヲ天子ニ象リ、京ヲ指ス

○ふる里 降る―古里

花と散り玉と見えつつあざむけば雪ふる里ぞ夢に見えける  
松

老いぬとて松はみどりぞまさりけり我が黒髪の雪のしろさに  
野さむさ

つくしにも紫おふる野べはあれど無き名かなし人ぞきこえぬ  
道

かるかやの關守にのみ見えつるは人もゆるさぬ道べなりけり  
海

海ならずたたへる水の底までにきよき心は月ぞてらさむ  
もカコセ

ひこ星の行きあひを待つかささぎのとわたる橋を我にかさなむ  
わたせカコセ

ながれ木とたつ白浪とやくしほといづれかからきわたつみの底  
浪  
よみ人しらず

\*わが髪の雪と磯邊のしら浪といづれまされり沖つ島守(土佐日記)  
○からき・海水  
○ささなみヤ志賀  
○萬葉九「ささ浪の」

浪題しらず  
(や敷)マ良の山風海ふけば釣するあまの袖かへる見ゆ  
ヤカコセマイ



○和漢朗詠集下「海人詠」

○翠帳紅閣萬事之禮法雖異、舟中浪上一生之歡會是同（和漢朗詠集下）

○かた 方一湯・浪増賀 攝經平子、多峯上人

○うき 憂き一浮舟

○つひのとまり 身の終り一つひの泊り・舟

○あし鴨の・水の江の

○すみ 住み一瀧み

○あし引の山

しら浪のよするなぎさに世をつくすあまの予なれば宿も定めず  
千五百番歌合に

舟のうち浪のしたにぞ老いにけるあまのしわざもいとまなの世や  
攝政太政大臣  
題しらず

さすらふる身は定めたるかたもなしうきたる舟の浪にまかせて  
前中納言匡房

いかにせむ身をうき舟の荷を重みつひのとまりやいづくなるらむ  
増賀上人  
のマイ

あし鴨のさわぐ入江のみづの江の世にすみがたき我が身なりけり  
人 曆

あし鴨の羽風になびくうき草の定めなき世を誰かたのまむ  
能宣朝臣  
「大中臣」セコ

老いにけるなぎさの松のふか緑しづめる影をよそにやは見る  
順  
「源」セコカ  
山水をむすびてよみ侍りける

あしびきの山下水に影見ればまゆ白妙にわれ老いにけり  
能因法師

○御ひたひ 蔽髪、比太飛トヨム、髪ノ前ヲ蔽ノ飾リ也（和名抄）

○衣のうら 衣裏寶珠

○法（法）佛道ノコト

冷泉院太皇太后宮 朱雀院皇女昌子内親王、

冷泉帝皇后三條太皇太后、觀音院太后トモ云フ

○おらて 老いて生ひて

上東門院 枇杷皇太后宮姉

○かはらむノ歌・まがふらむノ歌（祭花物語参照）

尼になりぬと聞きける人に、さうぞくつか  
はすとて  
法成寺入道前攝政太政大臣  
性コセ

○なれみてし花の袂をうち返し法の衣をたちぞかへつる

后にたち給ひける時冷泉院の后宫の御ひた  
ひを奉り給ひけるを出家の時返し奉りたま  
ふとて  
東三條院

そのかみの玉のかざしをうち返し今は衣のうらをたのまむ  
返し  
冷泉院太皇太后宮

つきもせぬ光のまにもまぎれなで老いて歸れるかみのつれなさ  
上東門院出家の後こがねの装束したる沈の  
きカ  
ずず、しるがねのはこにいらて梅の枝につ  
けて奉られける  
枇杷皇太后宮

かはらむ衣の色をおもひやる涙やうらのたまにまがはむ  
なマ（る歌）  
返し  
まがふらむ衣の玉にみだれつつ猶まださめぬ心ちこそすれ  
とコイセイ  
東門院  
（ゆめ歌）マ



○和泉式部集「尋ぬれ

ば」

○かひ 效一貝

○すみ 澄み一住み

○小野 山城國愛宕郡

\*忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは(古今十八)伊勢物語參照  
惟喬親王 文德帝皇子 小野宮

題しらす

和泉式部

汐のまによもの浦々たづぬれど今は我が身のいふかひもなし  
屏風の繪にしほがまの浦かきて侍りけるを 一條院皇后宮

いにしへのあまや煙となりぬらむ人めも見えぬしほがまの浦  
少將高光横川にのぼりて、かしらおろし侍

りにけるを聞かせ給ひて遣しける 天曆御歌

○都より雲の八重たつおく山のよかはの水はすみよかるらむ  
山なればせ 御返し

如覺

○百敷のうちのみつねに戀ひしくて雲の八重たつ山はすみうし  
世をそむきて小野といふ所にすみ侍りける

比、業平朝臣の雪のいと高うふりつみたる

をかき分けてまうで来て、夢かと思おもふ

思ひきや、とよみ侍りけるに

惟喬親王

夢かともなにか思はむうき世をばそむかざりけむ程ぞくやしき  
都のほかにすみ侍りける頃、久しうおとづ

にカ

○玉づき 雁帛(漢書  
蘇武傳)ノ故事

○ふけるの浦 吹く一  
吹飯浦(和泉國泉南郡)  
二條院 後一條帝皇女  
章ノ内親王、後冷泉院  
皇后

○菩提樹院 山城國洛  
東、榮花物語參照

○て淀：ほすゝみるめ  
○みるめ 海松一見る  
目

れざりける人につかはしける

女御徽子女王

雲井と雁の音ちかきすまひにも猶玉づきはかけずや有りけむ

亭子院おりの給はむとしける秋よみける

伊勢

しら露はおきてかはれど百敷のうつろふ秋は物ぞかなしき

殿上はなれ侍りてよみ侍りける

藤原清正

○あまつ風ふけるの浦にゐるたつのなか雲井に歸らざるべき

二條院菩提樹院におはしまして後の春むか

しを思ひいでて大納言經信まゐりて侍りけ

る又の日、女房の申し遣しける

よみ人しらす

いにしへのなれし雲井をしのぶとや霞を分けて君尋ねけむ

最勝四天王院の障子に大淀かきたる所

〔藤原〕コセ 定家朝臣

おほよどの浦にかりほすみるめだに霞にたえて歸るかりがね

最慶法師千載集かきて奉りけるつつみ紙に

墨をすり筆を染めつつ年ふれどかきあらは

せることの葉ぞなき、とかきつけて侍りけ



○ふみ 踏み一文  
○かひ 効一貝

○榮花物語「たぎつせ」  
\*音羽川せき入れて落  
す瀧つ瀬に人の心の見  
えもするかな(拾遺八)

爲忠 藤原知信子、鳥  
羽帝ノ頃ノ人

る御返しに

○濱千鳥ふみ置く跡のつもりなばかひある浦にあはざらめやは

上東門院高陽院におはしましけるに行幸侍

りて、せき入れたる瀧を御覺じて

後朱雀院御歌

瀧つ瀬に人の心を見ることはむかしに今もかはらざりけり

權中納言通俊、後拾遺えらび侍りける比、ま

づかたはしもゆかしく、など申して侍りけれ

ば、申しあはせてこそ、とてまだきよ書きも

せぬ本を遣して侍りけるを見て返しつかは

すとして

周防内侍

○浅からぬ心ぞ見ゆる音羽川せきいれし水の流ならねど

歌たてまつれと仰せられければ忠岑がなど

かきあつめて奉りける奥に書きつけける

壬生忠見

○言の葉のなかをなくなく尋ねればむかしの人に逢ひ見つるかな

遊女の心をよみ侍りける

藤原爲忠朝臣

大江舉周 赤染衛門子

○露・草

○忍ぶ草ししのぶ

○しのぶ 忍ぶ一忍草

○かかる 斯る一懸る・

露 濟時 藤原伊予子、圓

融帝ノ頃ノ人

○おき 置き一起き

○ね 寝一根・忍草

後白河院御歌

獨り寝の今宵もあけぬ誰としもたのまばこそは來ぬもうらみめ

大江舉周はじめて殿上ゆるされて草ふかき

庭におりて拜しけるを見侍りて

赤染衛門

○草分けてたちある袖のうれしさにたへず涙の露ぞこぼるる

秋ころ、わづらひけるおこたりて、たびたび

とぶらひける人に遣しける

伊勢大輔

うれしさは忘れやはする忍草しのぶる物を秋の夕暮

返し

大納言經信

秋風の音せざりせば白露の軒のしのぶにかからましやは

ある所にかよひ侍りけるを朝光大將みかは

して夜ひとよ物がたりしてかへりて又の日

○しのぶ草いかなる露かおきつらむ今朝はねもみなあらはれにけり

返し

左大將朝光

○あさぢふを尋ねざりせばしのぶ草思ひおきけむ露を見ましや

わづらひける人のかく申し侍りける

よみ人しらず



○消え・露  
小馬命婦 藤原棟世女

○ながらへむとしも思はぬ露の身のさすがに消えむことをこそ思へ  
返し 小馬命婦

○露の身の消えば我れこそさきだためおくれむ物か森のした草  
題しらず 和泉式部

○命さへあらば見つべき身のはてをしのばむ人の無きぞかなしき  
だにこそ(共ニイさへ)  
れいならぬ事侍りけるに知れりけるひじり

のとぶらひにまうで来て侍りければ  
定めなき昔がたりをかぞふれば我が身も數に入りぬべきかな  
大僧正行尊

五十首歌たてまつりし時  
世の中の晴れ行く空にふる霜のうき身ばかりぞおき所なき  
前大僧正慈圓

○世の中の：ふる霜の  
|| おき所なき  
○ふる・晴れ・おく・霜  
○無動寺 近江國滋賀郡

れいならぬこと侍りけるに無動寺にてよみ  
侍りける

たのみこし我がふる寺の苔のしたにいつしか朽ちむ名こそ惜しけれ  
題しらず 大僧正行尊

○くり返し我が身のとがを求むれば君もなき世にめづるなりけり

清原元輔

憂しといひて世をひたぶるにそむかねば物思ひしらぬ身とやなりなむ  
すらせよ(共ニイぶる) よみ人しらず

そむけどもあめの下をし離れねばいづくにもふる涙なりけり

延喜御時、女藏人内匠白馬節會見けるに車  
より紅のきぬをいだしたりけるを檢非違使  
「侍り」こそ

女藏人内匠

○大空にてるひの色をいさめてもあめの下には誰かすむべき  
よこ

かくいひければたださずなりけり  
はか  
例ならで、うづまきに籠りて侍りけるに心  
へりよこ

周防内侍

○かくしつ々たべの雲となりもせばあはれかけても誰かしのぼむ  
にこいせい

題しらず

前大僧正慈圓

○おも ねど世をそむかむといふ人のおなじ數にや我もなるらむ  
なりなカこそ(共ニイりな)

西行法師

○あめ 天一雨  
○ふる・雨  
内匠 父祖未詳、醍醐  
帝ノ頃ノ人  
○白馬 節會正月七日  
アヲウマノセチエ

○ひの色 日一緋



かずならぬ身をも心のもりがほにうかれては又歸り來にけり  
愚なる心のひくにまかせてもチカモイセイさはいかにつひの思ひは  
年月をいかで我が身に送りけむ昨日の人もけふは無き世にをコ  
うけがたき人のすがたに浮び出でてこりずや誰も又しづむべき  
守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに 寂蓮法師  
そむきても猶うき物は世なりけり身を離れたる心ならねば  
述懐の心をよめる

身のうさを思ひしらずばいかがせむいとひながらも猶過ぐすかな  
前大僧正慈圓

なにごとを思ふ人ぞと人とはばこたへぬさきに袖ぞぬるべき  
いたづらに過ぎにしことやなげかれむ受けがたき身の夕暮の空  
うちたえて世にふる身にはあらねどもあらぬ筋にも罪ぞかなしき  
和歌所にて述懐のころを  
右衛門督通具

山里に契りしいほやあれぬらむ待たれむとだに思はざりしを

\*かた糸をそなたかな  
たによりかけてあはず  
は何を玉の緒にせむ  
(古今十一)

\*わだつ海の沖つ汐合  
に浮ぶ泡の消えぬもの  
から寄る方もなし(古  
今十七)

○あはれ 哀一泡

○なみだ 無み一涙

袖におく露をばつゆとしのべども馴れ行く月や色を知るらむ  
定家朝臣

○君が代にあはずは何を玉の緒のながくとまでは惜しまれし身を  
家隆朝臣

おほかたの秋の寢覺のながき夜も君をぞ祈る身を思ふとて  
和歌の浦や沖つ汐あひに浮び出づるあはれ我が身のよるべ知らせよ

その山の契らぬ月も秋風もすすむる袖に露こぼれつつ  
雅經

君が代にあへるばかりの道はあれど身をばたのまず行末の空  
皇太后宮大夫俊成女

惜しむともなみだに月も心からなれぬる袖に秋をうらみて  
千五百番歌合に 攝政太政大臣

浮きしづみ來む世はさてもいかがぞと心にとひてこたへかねぬる  
題しらず

我ながら心のはてを知らぬかな捨てられぬ世のまたいとはしき



長延 後鳥羽帝ノ頃ノ人

お返し物をおもふはくるしきに知らず顔にて世をや過ぎまし

五十首歌よみ侍りけるに述懐の心ぬコイセイ 守 覺法親王

○ながらへて世にすむかひはなけれども憂きにかへたる命なりけり

權中納言兼宗

○世を捨つる心は猶ぞなかりける憂きをばうしと思ひしれども

述懐の心もコイセイをよみ侍りける 左近中將公衡

捨てやらぬ我が身ぞつらきさりともおもふ心に道をまかせて

題しらず よみ人しらず

うきながらあればある世にふるさとの夢をうつつにさましかねても

源 師 光 つっこせ(共ニイつも)

うきながら猶をしまるる命かな後の世とてもたのみなければ

賀 茂 季 保

○さりとともたのむ心の行末もおもへば知らぬ世にまかすらむ

荒木田長延

○つくづくとおもへばやすき世の中を心となげく我が身なりけり

○川舟の：綱手繩くく  
るしくて

○くる 繰るく苦し

○渡る・舟 登辨 藤原俊成子、高

倉帝ノ頃ノ人

○はやせ川 早しく早

瀬川

○家長日記「かくては」

○流す・水

○やま川 止まむく山

川

○もろかづら もろし

一諸葛

○かけ・葛

入道前關白家百首歌よませ侍りけるに 刑部卿頼輔

川舟ののぼりわづら〔太政大臣〕コセふ綱手繩くるしくてのみ世をわたるかな

題しらず 大僧正覺辨 都カコイセイマ

○老いらくの月日はいとどはやせ川かへらぬ浪にぬるる袖かな

よみて侍りける百首歌を源家長が許に見せ

藤原行能

かきながす言の葉をだにしづむなよ身こそかくてもやま川の水

身のぞみかなひ侍らで、やしろのまじら

ひもせで籠りゐて侍りけるに、あふひを見

鳴 長 明

見ればまづいとど涙ぞもろかづらいかが契りてかけ離れけむ

題しらず もコイセイ 源 季 景 るらセイコイ

おなじくはあれないにしへ思ひでのなければとても忍ばずもなし

西 行 法 師

いづくにも生まれずばただ住まであらむ柴の庵のしばしなる世に



○あり明 在り一有明  
○つきせぬ 盡き一月

○月・日・空

承仁親王 後白河帝皇子

○東鑑參照

月の行く山に心を送りいれてやみなる跡の身をいかかせむ

五十首歌のなかに

前大僧正慈圓

おもふことなど〔た〕カマとふ人のなかるらむ仰げば空に月ぞさやけき

いかにして今まで世にはあり明のつきせぬ物をいとふ心は

西行法師山里よりまかりいでて、むかし出

家し侍りしその月日にあたりて侍るなど申

したりける返事に

八條院高倉

うき世出でし月日の影のめぐりきてかはらぬ道を又てらすらむ

太神宮の歌合に

太上天皇

大空に契るおもひの年もへぬ月日もうけよ行末の空〔カマ無〕

前大僧都全眞西國のかたに侍りける時つか

承仁法親王

はしける

人しれずそなたをしのぶ心をばかたぶく月にたぐへてぞやる

前大僧正慈圓おもふコイセイシのぶ、文にてはおもふほどの事も

申しつくしがたきよし申しつかはして侍り

○うはしのぶ 云は  
で忍ぶ一岩手信夫  
○えぞ 得ぞ一蝦夷  
○壺の石ぶみ 陸前國  
宮城郡多賀城ナル碑  
〔實際ノ碑ハ青森縣上  
北郡七戸壺村ニ坂上田  
村麻呂ノ建テシモノト  
云フ〕

○壁に生ふなる草い  
つまで草〔何時迄草ノ  
義ニテ生フル所イト儂  
キ意ト云フ〕

性空 橘善根子、花山  
帝ノ頃ノ人

○住みの江 住み一住

江

○みをつくし 身を盡

し一漂標

○まつ 松一待つ

ける返事に

前右大將頼朝

みちのくのいはてしのぶはえぞ知らぬかきつくしてよつぼのいしぶみ

世の中のつねなきころ

大江嘉言

○今日までは人を歎きて暮れにけりいつ身のうへにならむとすらむ

題しらず

清慎公

道芝の露にあらそふ我が身かないづれかまづは消えむとすらむ

皇嘉門院

何とかや壁におふなる草の名よそれにもたぐふわが身なりけり

權中納言資實

○來しかたをさながら夢になしつればさむるうつつのなきぞかなしき

松の木のやけけるを見て

性空上人

千とせふる松だにくゆる世の中にけふとも知らで立てるわれかな

題しらず

俊頼朝臣

かずならで世に住の江のみをつくしいつをまつともなき身なりけり

皇太后宮大夫俊成



○芦手長歌 芦手書キニ書ケル長歌。繪ナドノヤウニ書也(季吟註)  
○ふるの社の身 身の古る―布留の社  
○臨時祭 陰曆三月中ノ午ノ日ノ石清水八幡宮ノ祭

○やまる 山井―山藍(小忌衣ハ白布ニ山藍ニテ摺レルモノ)  
○日かげの組緒 冠ノ弁ノ左右ニカゲ垂レル白糸又ハ青糸ニテ組ミ作レル緒

うきながら久しくぞ世を過ぎにけるあはれやかけし住吉の松  
春日社歌合に松風といふことを世にぞカ  
かすが山谷の埋木朽ちぬとも君に告げこそ嶺の松風〔藤原〕コセ 家隆朝臣

なにとなく聞けば涙ぞこぼれぬる苔の袂にかよふ松風  
さうしにあしでなが歌など書きておくにけカ 女御徽子女王

みな人のそむきはてぬる世の中にふるの社の身をいかにせむ  
臨時祭の舞人にてもろとも侍りけるをと  
もに四位して後まつりの日つかはしける 實方朝臣

衣手の山井の水に影見えし猶そのかみの春ぞ戀ひしき  
返し通コセカ 道信朝臣

いにしへのやまゐの衣なかりせば忘らるる身となりやしなまし  
後冷泉院御時大嘗會に日かげのくみ緒して〔藤原〕コセ 實基朝臣

おもひいでて、そへていひ遣しける  
加賀左衛門

○ながめつつノ歌ノ次ニ、題知らず・大中臣能宣朝臣・水壘の中に残れる籠の音いとしも寒き秋の聲かな(コセ有)  
○小町集「にもちらで」

○小忌衣 舞人ノ裝束  
○たち 立ち―裁ち・衣  
○きて 来て―着て

たちながらきてだに見せよ小忌衣あかぬむかしの忘れがたみに

秋の夜きりぎりすを聞くといふ題をよめとカマ  
人々に仰せられておほとのごもりにけるあ秋夜 聞 菫コセ  
した、その歌を御覽じてコセカ 天曆御歌

秋の夜の暁がたのきりぎりす人づてならで聞かまし物を  
秋雨を〔カ〕 中務卿具平親王

ながめつつ我が思ふ事はひぐらしに軒のしづくのたゆる夜もなし  
題しらず 小野小町

木がらしの風にもみぢて人知れずうき言の葉のつもるころかな  
述懐百首歌よみたる時、紅葉を 皇太后宮大夫俊成

嵐ふく嶺の紅葉の日にそへてもろくなりゆくわが涙かな  
題しらず 崇徳院御歌

うたたねは萩ふく風におどろけどながき夢路ぞさむる時なき  
宮内卿

○竹の葉に風吹きよわる夕暮の物のあはれは秋としもなし  
すきぶカ 〔コイ〕



○つくづく 撞く一つくづく

○遺愛寺鐘歌枕聽(白氏文集)

○つげ 告げ一黃楊

○木綿着鳥 鷄ノ異名

○大峯 大和國吉野郡

夕暮は雲のけしきを見るからにながめじとおもふ心こそつけ  
暮れぬめりいくかをかくて過ぎぬらむ入りあひの鐘のつくづくとして  
西行法師

待たれつる入相の鐘の音すなりあすもやあらば聞かむとすらむ  
皇太后宮大夫俊成

曉とつげの枕をそばたてて聞くもかなしき鐘の音かな  
式子内親王

あかつきのゆふつけ鳥ぞあはれなるながき眼をおもふ枕に  
尼にならむと思ひたちけるを人のとめ侍り  
和泉式部

かくばかり憂きを忍びてながらへばこれよりまさる物もこそおもへ  
題しらず

たらちねのいさめし物をつれづれとながむるをだにとふ人もなし  
熊野へまゐりて大峯へ入らむとて年ごろや

○くらゐ山 位階一位  
山(飛騨國大野郡)  
\*人の親の心は闇にあ  
らねども子を思ふ道に  
まどひぬるかな(後撰  
十五)

○ささがにのいと  
○いとかかる 糸懸か  
るいと斯る

○西宮左大臣集「光まつ下」

しなひ立てて侍りけるめのとの許につかは  
しける  
大僧正行尊

あはれとてはぐくみたてしいにしへは世をそむけとも思はざりけむ  
百首歌たてまつりし時  
土御門内大臣

くらゐ山跡を尋ねてのぼれども子をおもふ道に猶まよひぬる  
百首歌よみ侍りけるに懷舊歌  
皇太后宮大夫俊成

○むかしだに昔と思ひしたらちねの猶戀ひしきぞはかなかりける  
述懷百首歌よみ侍りけるに  
俊頼朝臣

ささがにのいとかかりける身の程をおもへば夢の心ちこそすれ  
夕暮に蜘蛛のいとかなげに巢がくを、つ  
ねよりもあはれと見て  
僧正遍昭

ささがにの空にすかくもおなじことまたき宿にもいくよかはへむ  
題しらず  
西宮前左大臣

光まつ枝にかかれる露の命消えはてねとや春のつれなき  
野分したるあしたにをさなき人をだにとは



\*宮城野の露ふきむす  
ぶ風の音に小萩が上を  
思ひこそやれ(源氏物  
語・桐壺)

○こ萩 小一子

道貞 和泉守、式部夫

○信太の森 葛ノ名所

(和泉國)

○あき 秋一飽き

○葛の葉のうらみ顔

○うらみ 裏見一恨み

○家長日記「やらで：  
おくかな」  
○この一ふし 此の一  
節一子の一事

ざりける人に

赤染衛門

○あらく吹く風はいかにと宮城野のこ萩がうへを人のとへかし

和泉式部、道貞に忘れられてほどなく敦道親王

かよふと聞きて遣しける

うつろはでしばししのだの森を見よかへりもぞする葛のうら風

返し

和泉式部

あき風はすぐ吹けども葛の葉のうらみがほには見えじとぞ思ふ

やまひかぎりにおぼえ侍りけるとき定家朝

臣中將轉任の事申すとて民部卿範光もとへ

遣しける

皇太后宮大夫俊成

小笹原風まつ露の消えやらでこの一ふしをおもひおくかな

題しらず

前大僧正慈圓

世の中を今はの心つくからに過ぎにしかたぞいとど戀ひしき

世をいとふ心の深くなるままに過ぐる月日をうちかぞへつつ

ひとかたに思ひとりにし心には猶そむかるる身をいかにせむ

○なにゆゑにこの世を深くいとふぞと人のとへかしやすくこたへむ  
おもふべき我が後の世はあるかなきか無ければこそは此世にはすめ

西行法師

世をいとふ名をだにもさはとどめおきて數ならぬ身の思ひ出にせむ

身のうさを思ひしらでややみなましそむくならひの無き世なりせば

○いかがすべき世にあらばこそ世をも捨てあなうの世やとさらに思はむ

なにごとにとまる心の有りければさらにしも又世のいとはしき

入道前關白太政大臣

むかしより離れがたきはうき世かなかたみにしのぶ中ならねども

なげく事侍りけるころ大峯に籠るとて同行

どももかたへは京へ歸りねなど申してよみ

侍りける

おもひ出でてもしも尋ぬる人もあらば有りとなひそ定めなき世に

題しらず

かずならぬ身を何ゆゑに恨みけむとてもかくても過ぐしける世を



○山田のをしねしおし  
こめて  
○ひたすら ひたし引  
板

山田法師 傳未詳

○しづの男の：こりつ  
むるししづの程  
○しづし 柴一哲

百首歌たてまつりしに

前大僧正慈圓

いつかわれみ山の里のさびしきにあるじと成りて人にとはれむ

題しらず

俊頼朝臣

うき身には山田のをしねおしこめて世をひたすらに恨みわびぬる

年ごろ修行の心有りけるを捨てがたき事侍

りて過ぎけるに親などなくなりて心やすく

思ひ立ちけるころ障子に書き付け侍りける

山田法師

しづの男のあさなあさなにこりつむるしづの程も有りがたの世や

題しらず

寂蓮法師

數ならぬ身はなき物になしはてつ誰がためにかは世をもうらみむ

法橋行遍

○たのみ有りて今行末を待つ人や過ぐる月日をなげかざるらむ

守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに

源師光

○ながらへていけるをいかにもどかまし憂き身の程をよそに思はば

題しらず

八條院高倉

○あはれ西行が夢にも  
何のわざも衰へゆくに  
ただ此道ばかり末代に  
絶ゆべからずと見えたり  
りと云へり(八雲御抄)

うき世をば出づる日ごとにとへどもいつかは月の入るかたを見む

西行法師

なさけ有りし昔のみ猶しのばれてながらへまうき世にもふるかな

清輔朝臣

ながらへば又此のごろやしのばれむ憂しとみし世ぞ今は戀ひしき

寂蓮、人々すすめて百首歌よませ侍りける

にいなび侍りて熊野にまうでたる道にて夢

に何事もおとろへゆけど此道こそ世の末に

かはらぬ物はあれ猶この歌よむべきよし別

當湛快三位俊成に申すと見侍りて、おどろ

きながらこの歌をいそぎよみいだして遣し

ける奥に書きつけ侍りける

西行法師

すゑの世もこのなさけのみかはらずと見し夢なくばよ所に聞かまし

千載集えらび侍りける時ふるき人々の歌を

見て

皇太后宮大夫俊成



○津の國の<sub>レ</sub>ながらふ  
○ながらふ<sub>レ</sub>長ら<sub>レ</sub>長  
柄(攝津國)  
○よ 節間一世

蟬丸 父祖未詳、宇多  
帝皇子敦實親王ノ雜色

行末はわれをもしのぶ人やらむ昔をおもふ心ならひに

崇徳院に百首歌たてまつりける無常歌こふるコイセイ

世の中をおもひつらねてながむればむなしき空に消ゆる白雲「に」カ

百首歌に

式子内親王

くるるまも待つべき世かはあだし野の末葉の露に嵐たつなりふくせつたり

津の國におはして、みぎはのあしを見たま「まし」カマ

花山院御歌

津の國のながらふべくもあらぬかな短き蘆のよにこそ有りけれ

題しらず

中務卿具平親王

風はやみ萩の葉ごとにおく露のおくれさきだつ程のはかなさゾコイセイ(イの)

丸

秋風になびく淺茅の末ごとにおく白露のあはれ世のなか

世の中はとてまかくてもおなじこと宮もわら屋もはてしなれば

\*東風吹かば匂ひおこ  
せよ梅の花主なしとて  
春を忘るな(拾遺十六)  
○安樂寺 筑前國筑紫  
郡

○補陀落 補陀洛迦、  
津島小花樹ト譯ス。觀  
自在菩薩所居之山、  
在南海中(西城記)、  
興福寺ヲ喻フ  
○北の藤波 藤原氏北  
家即チ冬嗣ノ家系

### 新古今和歌集卷第十九

#### 神祇歌

知るらめやけふの子日の姫小松いむ末までさかゆべしとは

この歌は日吉社司社頭のうしろの山にふままかりてねの目し

て侍りける夜、人の夢に見えけるとなむカ

なさけなく折る人つらし我が宿のあるじ忘れぬ梅の立枝を

この歌は建久二年の春のころ筑紫へまかれりける者の安

樂寺の梅を折りて侍りける夜の夢に見えけるとなむ

補陀落の南の岸に堂たてて今ぞさかえむ北の藤なみ

此の歌は興福寺の南圓堂つくりはじめ侍りける時、春日

の奥のものと明神よみたまへりけるとなむひこ

夜や寒き衣やうすきかたそぎの行き合のまより霜や置くらむ

住吉の御歌となむ



\*住吉の岸の姫松人ならば幾世か經しと問はましものた(古今十七)

○しらなみ 知らずや  
白波

○みづ垣の久しき  
\*をとめ子が袖ふる山の瑞垣の久しき世より思ひそめてき(拾遺十九)

○現形、顯形 神佛ナ  
ドノカタチヲアラハスコト  
○ちはやふ々神

いかばかり年はへねとも住の江の松ぞ二たび生ひかはりぬる

この歌はある人住吉にまうでて、人ならばとはまし物を  
すみの江の松は幾たびおひかはるらむ、とよみて奉りける  
御返しとなむいへる

むつましと君はしらなみみづ垣の久しき世よりいはひそめてき  
伊勢物語に住吉に行幸の時おほむ神けぎやうし給ひてと  
しるせり

○人しれず今や今やとちはやふる神さぶるまで君をこそまで

この歌は待賢門院堀河、大和のかたより熊野へまうで侍  
りけるに春日へまゐるべき由の夢を見たりけれど後にま  
ゐらむと思ひてまかり過ぎけるを歸り侍りけるに託宣し  
給ひけるとなむ

道遠し程もはるかにへだたれり思ひおこせよ我も忘れじ

この歌は陸奥にすみ侍りける人、熊野へ三年まうでむと  
願をたててまゐりて侍りたるが、いみじう苦しかりけれ  
にカ

ば今二たびを如何にせむとなげきてお前にふしたりける  
夜の夢に見えけるとなむ

おもふ事身にあまるまでなる瀧のしばしよどむをなに恨むらむ

此歌は身のしづめる事をなげきて、あづまのかたへまか  
らむと思ひたちける人、熊野のおまへに通夜して侍りけ  
る夢に見えけるとぞ

われたのむ人いたづらになしはてば又雲分けてのぼるばかりぞ

賀茂の御歌となむ

○鏡にも影みたらしの水のおもにうつるばかりの心とを知れ

これ又賀茂にまうでたる人の夢に見えけるといへり  
ありきつつ来つつ見れどもいさぎよき人の心を我忘れめや  
石清水の御歌といへり

西の海たつ白浪のうへにしてなに過ぐすらむかりのこの世を

この歌は稱徳天皇の御時、和氣清麿を宇佐宮に奉り給ひ  
けるとき託宣し給ひけるとなむ

○なる瀧 成る一鳴瀧  
(紀伊國牟婁郡)

○みたらし 見一御手  
洗



○日本紀竟宴 日本紀ノ講義終リテ後催ス宴  
神日本磐余彦天皇 神武天皇  
千古 大江晋人子、宇多  
多帝ノ頃ノ人  
○此歌、日本竟宴相歌  
ニ下依姫 三統平  
玉依姫 直胃三風波一來ニ  
到三海邊(神代)  
猿田彦 天孫大神之子  
今當ニ當降行一故奉ニ迎  
相待ニ吾名是猿田彦大  
神(神代紀)  
望望 紀長雄子、古今  
集文序作者トイフ  
醒酒帝ノ頃ノ人  
○ひさかたの天  
玉依姫 海津見神ノ  
女、神武帝御母  
理平 父祖未詳、宇多  
帝ノ頃ノ人  
○此歌、竟宴歌ニ「神日  
本磐余彦天皇 大江千  
古」  
○天の磐舟 東有ニ美  
地ニ青山四周、其中亦  
有ニ天磐舟ニ飛降者ト  
(神武)  
\*霜八度おけど枯れせ  
ぬ榊葉の立榮ゆべき神  
のきねかも(古今廿)  
\*榊葉の香をかぐはし  
みとめくれればやそ氏人  
ぞまとみせりける(拾

延喜六年日本紀竟宴に神日本磐余彦天皇 大江千古  
しらなみに玉より姫のこしことはなぎさやつひにとまりなりけむ  
紀 望  
久方のあめの八重雲ふり分けてくだりし君をわれぞむかへし  
紀 望  
玉依姫  
とびかけるあまのいは舟尋ねてぞあきつ島には宮はじめける  
三 統 理 平  
賀茂の社の午日歌ひ侍りける歌  
やまとかも海にあらしの西ふかばいづれの浦に御舟つながむ  
紀 貫 之  
神樂をよみ侍りける  
おく霜に色もかはらぬ榊葉の香をやは人のとめて來つらむ  
紀 貫 之  
臨時祭をよめる

○宮人のすれる衣にゆふだすきかけて心を誰れによすらむ  
大將に侍りける時、勅使にて太神宮にまう  
でてよみ侍りける  
攝政太政大臣  
神風やみもすそ川のそのかみに契りしことの末をたがふな  
よよカ わするカ

遺十)  
○かけて 兼ねて一懸  
けて・木綿懸  
○神風や御裳襦川、  
五十鈴川(伊勢國度會  
郡)  
○そのかみ 川上一神  
代  
○みや川 見る一宮川  
(伊勢國度會郡)  
○かけて 兼ねて一懸  
けて・木綿懸  
○神風やいすず川  
○うむ 住む一澄む・  
水  
○神路の山 伊勢ノ内  
宮ノ御山  
○風や・なびくしで  
|| かけて  
○大倭日高見之國乎安  
國止定奉臣下津磐根樹  
宮柱太敷立(祝詞・  
大祓)

おなじ時外宮にてよみ侍りける 藤原定家朝臣  
契りありてけふみや川のゆふかつらながき世までもかけてたのまむ  
公繼卿、勅使にて太神宮にまうでて歸りの  
〔公卿〕コカセ(イ無)  
ぼり侍りけるに齋宮の女房の中より申しお  
くりける  
よみ人しらず  
うれしさもあはれもいかにこたへまし故郷人にとはれましかば  
春宮權大夫公繼  
返し  
神風やいすず川なみ數しらずすむべき御代に又かへりこむ  
太 上 天 皇  
太神宮の歌中に  
ながめばや神路の山に雲消えて夕べの空をいでむ月影  
神風やとよみてぐらになびくしでかけて仰ぐといふもかしこし  
題しらず  
西 行 法 師  
宮ばしらしらしたつ岩ねにしきたてて露もくもらぬ日のみ影かな  
神路山月さやかなるちかひ有りてあめの下をばてらすなりけり  
伊勢の月讀みの社にまゐりて月を見てよめ  
森マ コマ



○雲の高嶺 印度ノ靈  
鷲山、善闍峨山ノ譯名  
○影やはらぐる 和光  
同座(老子)

中院入道右大臣 源雅  
實子、雅定

○神風やいすずの川  
○すめ 住めー澄め

○神風や内外の宮

○神風や山田の原  
明親 五位左近將監、  
土御門帝ノ頃ノ人  
○秋の聲したつ岩根  
聲しー下つ岩根

る

さやかなるわしの高嶺の雲井より影やはらぐる月よみの杜

神祇歌とてよみ侍りける

前大僧正慈圓

やはらぐる光にあまる影なれやいすず川原の秋の夜の月

公卿勅使にて歸り侍りけるいちしのむまや  
にてよみ侍りける

中院入道右大臣

立ちかへり又も見まくのほしきかなみもすそ川の瀬々のしらなみ

入道前關自家百首歌よみ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

神風やいすずの川の宮柱いく千世すめとたてはじめけむ

俊 憲 法師

神風や玉くしの葉を取りかざし内外の宮に君をこそ祈れ

五十首歌たてまつりし時

越 前

かみかぜや山田のはらの榊葉に心の上めをかけぬ日ぞなき

社頭納涼といふことを

大 中 臣 明 親

○いすず川そよやまだきに秋のこゑしたついはねの松の夕かぜ

○香椎の宮 筑前國粕  
屋郡  
○ちはやぶる 香椎の  
宮  
御衣木 神體ヲ作ル本  
也(季吟註)  
成清 法印光清子

○さかき葉にそのい  
ふかひ  
○いふ 木綿一云ふ  
○かけ・木綿  
○みたらし 見一御手  
洗  
○かはる 變る一川

○木綿四手 神ニ木綿  
ヲツケタルヲ云フ

香椎宮の杉をよみ侍りける

よみ人しらず

ちはやぶるかしの宮のあや杉は神のみそぎにたてるなりけり

八幡宮の權官にて年ひさしかりける事をう

らみて御神樂の夜まゐりて榊にむすびつけ

侍りける

法 印 成 清

さかき葉にそのいふかひはなけれども神に心をかけぬまぞなき

賀茂にまゐりて

周 防 内 侍

年をへてうき影をのみみたらしのかはる世もなき身をいかにせむ

文治六年女御入内の屏風に臨時祭かけると

ころをよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

月さゆるみたらし川に影見えて氷にすれる山あるの袖

社頭雪といふ心をよみ侍りける

按 察 使 公 通

ゆふしでの風にみだるる音さえて庭白砂に雪ぞつもれる

十首歌合の中に神祇をよめる

前大僧正慈圓

君をいのる心の色を人とはばただすの宮のあけの玉垣



- 跡たれし 本地垂跡
- あふひ逢ふ日一祭・かけて
- 貴船 山城國愛宕郡幸平 宇平子、後鳥羽帝ノ頃ノ人
- 大御田 神田ノコト
- 川上の神 貴船ノ神
- 石川やせみの小川 加茂川ノ異名
- 辨 辨官
- 春日祭 二月上ノ中ノ日
- 資仲 藤原資平子、後一條帝ノ頃ノ人
- かくる・標
- あめ 天ノ雨
- みかさの山 三笠山
- 一笠・雨

みあれにまゐりて社の司おのおの葵をかけけるによめる

賀茂重保

跡たれし神にあふひのなかりせば何にたのみをかけてすぎましまカ(イギ)

社司ども貴布禰にまゐりて、あまごひし侍舟コ

りけるによめる(ついで)

賀茂幸平

○おほみ田のうるほふばかりせきかけてるせきにおとせ川上の神

鴨社歌合とて人々よみ侍りけるに月を

鴨長明

石川やせみの小川の清ければ月も流れを尋ねてぞすむ

辨に侍りける時、春日祭にくだりて周防内侍に遣しける

中納言資仲

萬代をいのりぞかくるゆふだすきかすがの山の嶺の嵐に

文治六年女御入内屏風に春日祭

入道前關白太政大臣

今日まつる神の心やなびくらむしでに浪たつ佐保の川風

家に百首歌よみ侍りける時、神祇の心を

あめのしたみかさの山のかげならでたのむかたなき身とは知らずや

- 伊家 藤原公基子、白河帝ノ頃ノ人
- をしほの山 惜しー小鹽山(山城國)
- まつ 待つー松
- 七の社 日吉山王七社
- ゆふだすきーかけて
- 六の道 六道(地獄・餓飢・畜生・修羅・人間・天上)
- みつの濱 満つー三津(志賀津・大津・粟津)
- 北野 京都市上京(大内ノ北)菅公ヲ祭ル
- 心つくし 心盡しー筑紫

皇太后宮大夫俊成

春日野のおどろの道の埋れ水末だに神のしるしあらはせ

大原野の祭にまゐりて周防内侍につかはし

藤原伊家

千世までも心してふけ紅葉ばを神もをしほの山おろしの風

最勝四天王院の障子に小鹽の山かきたる所 前大僧正慈圓

をしほ山神のしるしをまつの葉に契りし色はかへる物かはとマ

日吉社に奉りける歌中に二宮を

やはらぐる影ぞ麓にくもりなき本の光は嶺にすめども

述懐のこころを

我がたのむなの社のゆふだすきかけても六つの道にかへすな

おしなべて日吉の影はくもらぬに涙あやしき昨日今日かな

もろ人のねがひをみつのはま風に心すずしきしでの音かなとも

北野によみて奉りける

さめぬれば思ひあはせてねをぞなく心づくしのいにしへの夢



○かひ 效一峽

○新宮 紀伊國東牟婁郡

○熊野川 同上

○みなれ棹 二さすが

○さすが 棹さすーさすが

○徳大寺左大臣 後徳大寺左大臣ニ同ジ

○熊野の王子 熊野九十九王子ノ一

○岩代の王子 同上

○本宮 紀伊國東牟婁郡

熊野へまうで給ひけるとき道に花のさかり  
なりけるを御覽じて コセカ

白河院御歌

咲きにはふ花のけしきを見るからに神の心ぞ空にしらるる

熊野にまゐりて奉り侍りし

太上天皇

岩にむす苔ふみならずみくまの山のかひある行末もがな

新宮にまうづとて熊野川にて

○熊野川くだすはや瀬のみなれ棹さすがみなれぬ浪の通ひ路

白河院熊野にまうで給へりけるに御とも

人々鹽屋の王子にて歌よみ侍りけるに

徳大寺左大臣

立ちのぼるしほ屋の煙うら風になびくを神の心ともがな

熊野へまうで侍りしに、いはしるの王子に

人々の名などかきつけさせて、しばし侍り

しに拜殿のなげしに書きつけて侍りし歌 コセカ

よみ人しらず

○岩代の神は知るらむしるべせよたのむうき世の夢の行末  
熊野の本宮やけて年のうちに遷宮侍りしに

まゐりて

太上天皇

契りあればうれしきかかる折にあひぬ忘るな神もゆく末の空

加賀の守にて侍りける時しら山にまうでた シカ(ける)

りけるを思ひいでて日吉の客人の宮にてよ

み侍りける

左京大輔顯輔

年ふともこの白山わすれずばかりの雪をあらはれとも見よ

一品聰子内親王住吉にまうでて人々歌よみ

侍りけるに、よめる

藤原道經

住吉の濱松が枝に風ふけば浪のしらゆふかけぬまぞなき ヒコイセイ

ある所の屏風の繪に十一月神祭の家のみまへ

に馬にのりて人のゆく所を

能宣朝臣

さかき葉の霜うちはらひかれずのみすめとぞいのる神のみまへに 大中臣コセカ

延喜御時屏風に夏神樂の心をよみ侍りける 貫

之

川やしろしのをりはへほす衣いかにほせばかなぬかひざらむ

○白山 加賀國能美郡

○客人の宮 日吉九王子ノ一、白山ト同神

○すみよし 住み良し

一住吉

○まつ 松一待つ

○住吉のノ歌ノ次ニ、

奉幣使に住吉に参りて

昔住みけるとまりの荒

れたりけるをよみ侍り

ける・津守有基・すみよ

しと思ひし宿は荒れに

けり神のしるしをまつ

とせし間に(コセマ有)

○かれず 枯れ一誰れ

○夏神樂 夏祓ノ時ノ

神樂

○川社 夏祓ノ時、川

邊ニ神ヲ祭ルコト



新古今和歌集卷第二十

釋教歌

○しめぢが原 下野國都賀郡、艾草ノ名所

○初メノ十四首及ビ谷川ノ歌ノ詞書(マ無)

○御津の寺 大阪市南区

行基 俗姓高志氏、聖武帝ノ頃ノ人

傳教 俗性三津氏、延曆寺開山、最澄、桓武帝ノ頃ノ人

○あのかたらしみやく三ぼたい 無上正覺知、無上正覺ト譯ス

なほたのめしめぢが原のさせも草我世の中にあらむかぎりは  
なにか思ふなにとか歎く世の中はただ朝顔の花のうへの露  
思ふカ わがカ、われコセマ

このふた歌は清水觀音御歌となむいひ傳へたる  
カハコセ(共ニイとか)にカイハ

智縁上人伯者の大山に参りて出でなむとし  
知カ

ける曉、夢に見えける歌  
山ふかく年ふる我もあるものをいづちか月の出でて行くらむ

難波のみつ寺にて、あしの葉のそよぐを聞  
きて

あしそよぐしほ瀬の浪のいつまでかうき世の中にかびわたらむ  
比叡山中堂建立の時

阿耨多羅三藐三菩提の佛達我が立つ柚に冥加あらせ給へ  
傳教大師

行基菩薩

傳教大師

○入唐 仁壽三年 智證 俗姓氣氏、陽成帝ノ頃ノ人

○みたけ 大和國金峯山

日藏 三善諸行弟、道賢、醍醐帝ノ頃ノ人

法圓 傳未詳

○亂れ糸

源信 卜部正親子、住生要集作者、一條帝ノ頃ノ人

○皆見龍女 忽然之間 變成男子 具菩薩行 卽住南無垢世界 坐寶蓮華 成等正覺 提婆品

入唐時歌

法の船さしてゆく身ぞもろもろの神も佛も我をみそなへ

菩提寺の講堂の柱に蟲のくひたりける歌  
ハマ

しるべある時にだにゆけ極樂の道にまだへる世の中の人  
コセマ

みたけの室の岩屋に籠りてよめる

寂莫の苔の岩戸のしづけきに涙の雨のふらぬ日ぞなき

臨終正念ならむことを思ひてよめる  
つゆマ

南無阿彌陀佛の御手にかくる糸のをはり亂れぬ心ともがな

題しらず

われだにも先づ極樂にうまれなば知るもしらぬもみなむかへてむ

天王寺の龜井の水を御覽じて

濁りなきかめ井の水を結びあげて心のちりをすすぎつるかな

法華經廿八品歌、人々によませ侍りけるに

提婆品の心を

わだつ海の底より來つる程もなく此の身ながらに身をそきはむる  
性カ(イ成)

智證大師

日藏上人

法圓上人

僧都源信

上東門院

法成寺入道前攝政太政大臣



齊信 葦原爲光子、四  
納言ノ一人、後一條帝  
ノ頃ノ人  
○我等敬ニ信佛ニ當リ著ニ  
忍辱之鏡ハ爲レ説ニ是經ハ  
故忍ニ此諸難事ハ我不レ  
愛ニ身命ハ但惜ニ無上道ハ  
我等於ニ來世ニ護ニ持佛  
所レ囑(勸持品)  
○あふち 逢ふ一楊

\*音にのみきくの白露  
夜はおきて晝は思ひに  
あへず消ぬべし(古今  
十一)

○おきく 聞く一菊  
○おきて 起き一置き  
○おく・消え・露  
○おきくの白露 夜はお  
きて  
○つとめて 勤めて一  
翌朝  
○譬如 旃陀羅 驅レ羊  
就レ屠所 歩々近レ死地  
人命亦如レ是(摩耶經  
偈)  
○觀心云々(金剛界儀  
軌)  
公胤 源憲俊子、後鳥  
羽帝ノ頃ノ人

勸持品の心を

數ならぬ命はなにか惜しからむ法とく程をしのぶばかりぞ

五月ばかりに雲林院の菩提講にまうでてよ

み侍りける

肥

後

紫の雲の林を見わたせば法にあふちの花さきにけり

涅槃經よみ侍りける時、夢に、ちる花に池の

氷もとけぬなり花吹きちらす春の夜の空、

とかきて人の見せ侍りければ夢のうちにか

へすとおぼえける歌

谷川のながれし清くすみぬればくまなき月の影もるかびぬ

述懐歌中に

前大僧正慈圓

ねがはくはしばし關路にやすらひてかかげやせまし法のともしび

とく御法さきの白露よるはおきてつとめて消えむことをしぞ思ふ

極樂へまだ我が心行きつかずひつじのあゆみしばしとどまれ

觀心如月輪若在輕霧中の心を

權僧正公胤

○十界 六道・聲聞・  
緣覺(十二因緣ヲ觀ジ  
テ覺ルガ故ニ緣覺ト云  
ヒ、師ニヨラズシテ獨  
悟スル故ニ獨覺トモ稱  
ス)・菩薩・佛  
○心經 磐若心經  
○色即是空(磐若經)

○十樂 西方淨土ノ十  
種ノ快樂、聖衆來迎樂・  
蓮華初開樂・身相神通  
樂・妙境界樂・快樂無邊  
樂・引接結緣樂・聖衆俱  
會樂・見佛聞法樂・隨心  
供佛樂・增進佛道樂(往  
生要集上)

\*末の露本の葉や世の  
中のおくれさきだつた  
めしなるらむ(遍昭集)

○深きえに 江一縁

○我が心猶晴れやらぬ秋霧にはのかに見ゆる有明の月

家に百首歌よみ侍りける時、十界の心をよ

み侍りけるに緣覺のこころを

攝政太政大臣

奥山に獨りうき世はさとりにき常なき色を風にながめて

心經の心をよめる

小

侍

從

色にのみ染し心のくやしきをむなしととける法のうれしさ

攝政太政大臣家百首歌に十樂の心をよみ侍

りけるに聖衆來迎樂

寂

蓮

法

師

紫の雲路にさそふ琴のねにうき世をはらふ嶺の松風

蓮花初開樂

これやこのうき世のほかの春ならむ花のとほそのあけぼのの空

快樂不退樂

春秋もかぎらぬ花におく露はおくれさきだつ恨みやはある

引接結緣樂

立ちかへりくるしき海におくあみも深きえにこそ心ひくらめ







○寂然法門百首「山深  
き」  
○此日已過、命即減少  
如三小水魚、斯有何樂  
(出曜經)  
○悲鳴云々(摩訶止觀)  
○棄恩入無爲(眞實  
報、恩者(悲華經))  
○夫盛必有衰、合會  
有別離(涅槃經)  
季廣 源季兼子  
○かかる 懸る—斯る  
○聞名欲往生、皆悲  
到彼岸(無量壽經)  
○いきの松—待つ  
○いき 行き—いき  
○づくし 盡し—筑紫  
○寂然法門百首「しに」  
○かひ 效—貝  
○のり 法—海苔  
○心懷云々(壽量品)  
○十戒 玆ノ四戒ノ他  
ニ不妄語・不説過罪・不  
自讚毀他・不慳・不瞋不  
謗三寶ノ六戒(梵網經)  
○唯心房集「せで」

やみふかき木の本ごとに契りおきて朝たつ霧の跡の露けさ  
まこいせい  
此日已過、命即衰滅  
けふ過ぎぬ命もしかとおどろかす入相の鐘のこゑぞかなしき  
悲鳴 嘔咽、痛戀本群  
素 覺 法 師  
草ふかきかりばの小野を立ち出でて友まどはせる鹿ぞなくなる  
棄恩入無爲  
寂 然 法 師  
そむかずばいづれの世にかめぐり逢ひて思ひけりとも人に知られむ  
合會有別離  
源 季 廣  
○あひみても嶺にわかるこしら雲のかかる此の世のいとほしきかな  
聞名欲往生  
寂 然 法 師  
音にきく君がりいつかいきの松まつらむ物を心づくしに  
心懷戀慕湯仰於佛  
るこい  
わかれにしそのおも影の戀ひしきに夢にも見えよ山の端の月  
十戒歌よみ侍りけるに不殺生戒  
わだつ海のふかきにしづむいさりせでたもつかひあるのりを求めよ  
ばか

○白波 中平元年張角  
反：角餘賊在二西河白  
波谷爲盜、時俗號三白  
波賊(後漢書靈帝記)  
○つま 妻—褖  
○かさね・衣  
○なさけ 情—酒  
○十如是 凡テノ事理  
ニ合マレアルト種ノ普  
遍性、相・性・體・力・  
作・因・縁・果・報・  
本末究竟等ノ稱  
○其後當ニ作佛ニ號名  
曰ニ彌勒ニ廣度ニ諸衆生ニ  
其數無有量  
○立て・柱

不偷盜戒  
うき草の一葉なりとも磯がくれ思ひなかけそ沖つしら波  
不邪嬌戒  
さらぬだに重きがうへにさ夜衣我がつまならぬつまなかさねそ  
不沾酒戒  
花のもと露のなさは程もあらしゑひなすすめそ春の山かぜ  
入道前關白家に十如是歌よませ侍りけるに  
如是報  
二 條 院 讚 岐  
うきも猶昔のゆゑとおもはずばいかが此の世を恨みはてまし  
待賢門院中納言、人々すすめて廿八品歌よ  
ませ侍りけるに序品 廣度諸衆生、其數無  
有量の心を  
皇太后宮大夫俊成  
わたすべき數もかぎらぬ橋柱いかにたてけるちかひなるらむ  
美福門院に極樂六時讚の繪にかかるとべき歌  
奉るべきよし侍りけるに、よみ侍りける時



○入日をみてもといふは觀經の目想觀の心なるべし(季吟註)

○毎日晨朝入<sub>ニ</sub>於諸定<sub>ハ</sub>遊<sub>ニ</sub>化六道<sub>ニ</sub>拔<sub>レ</sub>苦與<sub>レ</sub>樂(地藏延命經) 選子内親王 村上帝皇女、發心和歌集ヘソノ御撰

○衣裏寶珠ノ譬喩

○此身如<sub>レ</sub>夢、爲<sub>ニ</sub>虛妄見<sub>ニ</sub>(方便品)

○佛入涅槃ノ日

に<sub>カ</sub>、大衆法を聞きて彌歡喜瞻仰せむ

いまだこれ入り日を見てもおもひこし彌陀の御國の夕暮の空

曉<sub>ニ</sub>いたりて浪のこゑ金の岸によするほど

いにしへの尾上の鐘に似たるかな岸うつ浪の曉のこゑ

百首歌の中に毎日晨朝入諸定の心を

式子内親王

しづかなる曉<sub>ニ</sub>ごとに見わたせばまだふかき夜の夢ぞかなしき

發心和歌集の歌、普門品種々諸惡趣

選子内親王

あふ事をいづくにてとか契るべきうき身のゆかむかたを知らねば

五百弟子品の心を

僧都源信

玉かけし衣のうらをかへしてぞおろかなりける心をばしる

維摩經十喻中に此身如夢といへる心を

赤染衛門

○夢や夢うつつや夢とわかぬかないかなる世にかさめむとすらむ

二月十五日の暮がたに伊勢大輔のもとにつか

はしける

相模

常よりもけふの煙のたよりにや西をはるかに思ひやるらむ

○おもひ入日 思入る  
一入日

○空だのめ・月

○若有<sub>ニ</sub>女人<sub>ニ</sub>聞<sub>ニ</sub>是經典<sub>ハ</sub>如<sub>レ</sub>說修行<sub>、</sub>於<sub>レ</sub>此命終<sub>即</sub>往<sub>ニ</sub>安樂界<sub>ニ</sub>(藥王品)

返し

伊勢大輔

○けふはいとど涙にくれぬ西の山おもひ入日の影をながめて

西行法師をよび侍りけるに、まかるべきよ

しは申しながらまうで來で月のあかかりけ

るに門の前を通ると聞きてよみて遣しける

待賢門院堀河

○西へ行くしるべとおもふ月影の空だのめこそかひなかりけれ

返し

西行法師

○立ちいらで雲間を分けし月かげは待たぬけしきや空に見えけむ

人の身まかりにける後、結縁經供養しける

に即住安樂世界の心をよめる

瞻西上人

○むかし見し月の光をしるべにて今夜や君が西へ行くらむ

觀心をよみ侍りける

西行法師

○やみはれて心の空にすむ月は西の山邊やなくななるらむ



斯集依或人之需姉小路宰相基綱

染筆云々頃右衛門尉平賴房感得

此本凡兩冊上下一檢之無誠訛謬者乎

昔明應丙辰閏仲春下旬記之

梧桐樹下羽林 藤 判

右本全部二帖者左衛門尉源

親榮感得之

永正元年季秋廿七日



真名序 日野親經作  
 (原、無)(七)二依ル  
 \* 玄象成、文、列宿有、  
 章(成公綏、天地賦)  
 \* 五際 君臣、父子、兄  
 弟、夫婦、朋友ノ關係  
 \* 六情 喜怒哀樂愛戀  
 清地。此云三素鷲(托)  
 \* 鴻徽 大綱  
 \* 崑嶺 崑崙山  
 \* 鄧林之材 夸父不  
 量力、欲追日影、  
 未、至道渴而死、棄其  
 杖、尸膏肉所、浸生鄧  
 林、鄧林彌廣數千里、  
 (列子湯問第五)  
 \* 希夷 視之不見名  
 曰夷、聽之不聞名曰  
 希(老子)道ノ本體  
 \* 玄圃(崑崙ノ一名)、  
 瑤(玉ニ次ク石)砌 仙  
 洞御所意  
 \* 犀象之牙角、翡翠之  
 羽毛 優秀ナル歌ノ意

### 新古今和歌集序

夫和歌者。群德之祖。百福之宗也。玄象天成。五際六情之義未著。素鷲地靜。三十一字之詠甫興。爾來源流寔繁。長短雖異。或舒下情而達聞。或宣上德而致化。或屬遊宴而書懷。或採艷色而寄言。誠是理世撫民之鴻徽。賞心樂事之龜鑑者也。是以聖代明時。集而錄之。各窮精微。何以漏脫。然猶崑嶺之玉。採之有餘。鄧林之材。代之無盡。物既如此。歌亦宜然。仍詔參議右衛門督源朝臣通具。大藏卿藤原朝臣有家。左近衛權中將藤原朝臣定家。前上總介藤原朝臣家隆。左近衛權少將藤原朝臣雅經等。不擇貴賤高下。令撫錦句玉章。神明之詞。佛陀之作。爲表希夷。雜而同隸。始於曩昔。迄于當時。彼此總編。各傳呈進。每至玄圃花芳之朝。瓊砌風涼之夕。對難波津之遺流。尋淺香山之芳躅。或吟式詠。拔犀象之牙角。無黨無偏。採翡翠之羽毛。裁成而得二千首。類聚而爲二十卷。名曰新古今和歌集。矣。時令節物之篇。屬四序而星羅。衆作雜詠之什。並群品而雲布。綜緝之致。



\*代郎 奉天子法駕  
迎于代邸(文帝本記)  
後鳥羽院ノ御即位ヲ漢  
文帝ニ比シテ云フ  
\*汾陽之蹤 堯治天  
下之民一平四海内之政  
往見三子子藟姑射之山  
汾水之陽一宵然喪三天  
下一焉(莊子・逍遙遊  
篇)御讓位ヲ云フ  
\*今上陛下 土御門帝  
\*笠宰 君臣  
\*華夷 都鄙  
\*無爲 爲無爲則無  
不治(老子)  
\*染毫探賤 筆ヲ採リ  
テ集ヲ撰フ  
\*絲言 王言如絲其出  
如綸(禮記)綸言  
\*法河涉虛 月卿雲客  
(涉虛)說ニ歌仙)  
\*五輩 通具等撰者五  
人  
\*神仙之居 仙洞御所  
\*天章 御製  
\*嘉尚之餘 歌道ヲ賞  
シ給フ餘リ

蓋云備矣。伏惟。來自代邸。而踐天子之位。謝於漢宮。而追汾陽之蹤。今上陛下之嚴親也。雖無隙帝道之諮詢。日域朝廷之本主也。爭不賞我國之習俗。方今葦宰合體。華夷詠仁。風化之樂。萬春。春日野之草悉靡。月宴之契。千秋。秋津洲之塵惟靜。誠膺無爲有截之時。可頌染毫探賤之志。故撰此一集。永欲傳百王。彼上古之萬葉集者。蓋是和歌之源也。編次之起。因准之儀。星序惟逸。煙鬱難披。延喜有古今集。四人含綸命而成之。天曆有後撰集。五人奉絲言而成之。其後有拾遺。後拾遺。金葉。詞花。千載等集。雖出於聖王數代之勅。殊恨爲撰者一身之取。因茲訪延喜天曆二朝之遺美。定法河涉虛。五輩之英豪。排神仙之居。展刊修之席而已。斯集之爲體也。先抽萬葉集之中。更拾七代集之外。深索而微長無遺。廣求而片善必舉。但雖張網於山野。微禽自逃。雖連筌於江湖。小鮮偷漏。誠當視聽之不達。定有篇章之猶遺。今只隨探得。且所勅終一也。抑於古今二者。不載當代之御製。自後撰而初加其時之天章。各考一部。不滿十篇。而今所入之自詠。已餘三十首。六義若相兼。一兩雖可足。依無風骨之絕妙。還有露詞之多加。偏以耽道之思。不顧多情之眼。凡厥取捨者。嘉尚之餘。

\*冲襟 ミ心ノウチ(日本紀)  
\*伏羲 支那古代ノ三皇ノ初ニ位スル聖帝  
\*聖造之書史 天子ノ造リ給ヘル書册  
\*叡策 御親製ノコト  
\*無何之郷 出ニ六極之外ニ遊ニ無何有之郷(莊子・應帝王)  
\*温故知新 子曰温故而知新、可三以爲師(論語・爲政篇)

特運冲襟。伏羲基皇德。而四十萬年。異域自雖觀。聖造之書史焉。神武開帝功。而八十二代。當朝未聽。叡策之撰集矣。定知天下之都人士女。謳謠斯道之遇逢矣。不獨記仙洞無何之郷。有嘲風弄月之興。亦欲呈皇家元久之歲。有温故知新之心。修撰之趣。不在茲乎。于時聖曆乙丑王春三月云爾。



昭和八年九月六日印刷  
昭和八年九月十三日發行



版 權  
所 有

發 兌

東京市芝區新橋  
七丁目十二番地

改造文庫 第二部 第五篇

新古今和歌集 定價五十錢

校註者 吉澤義則

發行者 山本三生

印刷者 村尾一雄

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

改 造 社

振替口座東京八四〇二番  
電話芝(43)自一一二一  
至一一二四番

(福山製本)

株式會社英舍印刷



我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犠牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國內を震撼し、日々數千通の感謝状が舞ひ込んだ。今迄特權階級のみを藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無産階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して茲に「改造文庫」を發刊せんとす。尙その内容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆の一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

□此の文庫は、内容嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。  
 □此の文庫に收容するものは、東西古今百般の書に互り、校訂、註釋、翻譯、總て典據たるべきを期す。  
 □此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。  
 □表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜を考慮に容れて之を示す。  
 □表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。  
 □定價及び送料左表の如し。

表紙背の符號	定價(錢)	送料(錢)
1	一〇	二
2	二〇	四
3	三〇	六
4	四〇	八
5	五〇	一〇
6	六〇	一二
7	七〇	一四
8	八〇	一六

改造文庫第一部目録

國富論(上卷)	アダム・スミス著 竹内謙二譯	8	古代社會(上卷)	モルガン著 荒畑寒村譯	5	共產主義小兒病	レニーン著 山川均譯	3
國富論(中卷)	アダム・スミス著 竹内謙二譯	8	古代社會(下卷)	モルガン著 荒畑寒村譯	5	農村問題	レニーン著 荒川實藏譯	3
國富論(下卷)	アダム・スミス著 竹内謙二譯	6	エミール(下卷)	ルソウ著 内山賢次譯	4	労働組合論	レニーン著 藤井米藏譯	3
人口論	ロバート・マルサス著 マルサス著	近刊	國家論	オッペンハイム著 廣島定吉譯	2	幸徳秋水集	幸徳秋水著	2
經濟學原理	デビッド・リカード著 スチユアト・ミル著	近刊	金融資本論	猪俣津南雄著	4	中江兆民集	中江兆民著	2
經濟學原理(上卷)	スチユアト・ミル著	近刊	日本開化小史	田口卯吉著	2	財產起源論	レヴィンスキイ著 貴島克己譯	1
經濟學原理(下卷)	スチユアト・ミル著	近刊	日本經濟論	田口卯吉著	1	組織論	鈴木厚著	3
經濟學方法論	カール・メンガー著	近刊	日本經濟學說の要領	瀧本誠一著	2	三民主義	孫中山著 金井寛三譯	3
社會主義の發展	エンゲルス著 堀利彦譯	1	日本商業史	横井時冬著	4	唯一者とその所有	スタイルネル著 辻潤譯	6
辯證法的唯物觀	ディッゲン著 山川均譯	2	日本工業史	横井時冬著	4	世事見聞録	武陽隱士著 本庄榮治郎校訂	4
哲學の實果	ディッゲン著 山川均譯	1	經濟學の實際知識	高橋龜吉著	2	金融資本論	ヒルファディング著 林基譯	7
神と國家	バスターニン著 本莊可宗譯	1	リッケルト論文集	リツケルト著	2	近世封建社會の研究	本庄榮治郎著	2
婦人論	ベリベル著 山川菊榮譯	6	フッサール論文集	フツサル著	2	我近世の農村問題	本庄榮治郎著	3
			女工哀史	細井和喜藏著	4	マルクスの歴史、社會並に國家理論(上卷)	クノ別府共譯	近刊
			婦人解放論	スチユアト・ミル著	近刊	マルクスの歴史、社會並に國家理論(下卷)	クノ別府共譯	近刊
			社會進歩と地位	ラツパボット著 山川菊榮譯	2	マルクスの國家觀	山本榮譯	5
						マルクス主義經濟學	河上肇著	3







日輪	櫛光利一著	1	自選空を仰ぐ	土岐善磨著	2	一青年の告白	ジョージ・ムーア著 辻 潤譯	3
勞働者の居る船	華山嘉樹著	1	自選童謡集	北原白秋著	2	一週間	リベインスキー著 池谷信三郎譯	2
海に生くる人々	華山嘉樹著	2	自選國民歌謠集	北原白秋著	2	室生犀星詩集	室生犀星著	5
小公子	パルネット著 若松 隆子譯	2	自選舞誦詞集	北原白秋著	2	千家元麿詩集	千家元麿著	3
ホワイト・ファンゲ	堀利彦譯	3	背徳者	石川 澄譯	2	横瀨夜雨詩集	横瀨夜雨著	5
はやり唄	小杉天外著	3	チエホフ書簡集	内山賢次譯	5	修禪寺物語	岡本 義堂著	3
自選朝の螢	豊藤茂吉著	2	鴛の卵	土岐善磨著	3	少年の悲哀	國木田獨步著	2
自選十年	島木素彦著	2	愚庵歌集	豊藤茂吉編(近)	3	運命論者	國木田獨步著	2
自選川のほとり	古泉千櫻著	2	芭蕉遺語集	萩原井泉水校訂	3	愛慾	武者小路實篤著	2
自選松の芽	中村憲吉著	2	茶七番日記(上巻)	萩原井泉水校訂	4	作者別萬葉全集	土岐善磨編著	6
自選海やまの	釋 暹 察著	4	茶七番日記(下巻)	萩原井泉水校訂	4	作者別萬葉以後	土岐善磨編著	6
自選立春	木下利之著	2	おらが春	萩原井泉水校訂(近)	4	自傳	片山 潛著	3
自選花檜	北原白秋著	3	新花つみ(実村)	萩原井泉水編(近)	3	日本橋	泉 鏡 花著	5
自選人間往來	與謝野晶子著	2	寡婦マルタ	オルセシュコ著 高見 陸 郎譯	3	佛蘭西童話集(第一)	ボームン夫人著 長松 英一譯	3
自選規の木	窪田 空穂著	2	句集虚子	高瀬 虚子著	6	佛蘭西童話集(第二)	ドルノア夫人著 長松 英一譯	5
自選野原の郭公	若山 牧水著	2	井泉水句集	萩原井泉水著	5	佛蘭西童話集(第三)	ヘーロ 著 長松 英一譯	3
自選原生林	前田 夕暮著	3	サニ	アルワイグセフ著 武林 無相譯	6	巴里の憂鬱	ボオドレエル著 三好 達治譯	2

死の舞踏	ストリンベリイ著 山本有三譯	2	陸の人魚	菊池 寛著	4	新人國記	ア・フランソワ著 木村 恭一譯	4
奈落の人々	和氣律次郎著 和氣 律次郎譯	3	第二の接吻	菊池 寛著	3	シラー詩集	小栗 孝則譯	4
争闘	和氣 律次郎著	2	東京行進曲	菊池 寛著	3	どっこいおいらは	ト 達 譯	2
無名作家他廿(短篇小説篇)	菊池 寛著	5	結婚二重奏	菊池 寛著	3	獄窓から	和 田 久 太 郎 著	5
出世	他廿(短篇小説篇) 2 菊池 寛著	4	不壞の白珠	菊池 寛著	3	人波	アルワイグセフ著 原 久一 郎 譯	3
恩の	他廿(短篇小説篇) 2 菊池 寛著	5	イブセン全集(一)	河野永田小寺譯	3	結婚の悲劇	アルワイグセフ著 原 久一 郎 譯	5
彼方に	他廿(短篇小説篇) 2 菊池 寛著	4	イブセン全集(二)	大山長谷部河野譯	5	舌難の路(上)	アルワイグセフ著 原 久一 郎 譯	4
噂の發生	他廿(短篇小説篇) 2 菊池 寛著	4	イブセン全集(三)	中村 仲木譯	5	舌難の路(下)	アルワイグセフ著 原 久一 郎 譯	4
父歸る	他廿(短篇小説篇) 2 菊池 寛著	5	イブセン全集(五)	大山 大 中 村 譯	5	芭蕉書簡集	萩原 羅 月 著	3
藤十郎	他十(戯曲篇) 菊池 寛著	5	キの手記	ピットニツキ著 三 矢 剛 譯	4	矢鳥柳堂	志 賀 直 哉 著	2
眞珠夫人	菊池 寛著	6	聖書物語(舊約の巻)	ル 神 近 市 子 著	3	焚火	志 賀 直 哉 著	2
慈悲心鳥	菊池 寛著	4	聖書物語(新約の巻)	ル 神 近 市 子 著	3	老 人	志 賀 直 哉 著	2
新珠	菊池 寛著	5	洋服箏筒	ト 大 笠 武 生 譯	2	網走りまで	志 賀 直 哉 著	2
火華	菊池 寛著	4	今戸心中	廣 津 柳 浪 著	3	速夫の妹	志 賀 直 哉 著	2
受難華	菊池 寛著	5	嬰兒殺し	山 本 有 三 著	3	好人物の夫婦	志 賀 直 哉 著	2
赤い白鳥	菊池 寛著	3	芭蕉・夜船・草の詩	吉 田 絳 二 郎 著	3	雪の日	志 賀 直 哉 著	2
明眸禍	菊池 寛著	5	ドレフニス事件	大 佛 次 郎 著	3	暗夜行路	志 賀 直 哉 著	3
新女性鑑	菊池 寛著	3						



短歌集	石川 藤木著	4	國歌八論	土岐 善實編	3	唐人お吉	十二谷義三郎著	2
詩集	石川 藤木著	5	性に眼覚める頃	室生 犀尾著	4	時の敗者・唐人お吉	十二谷義三郎著	4
小説集(上)	石川 藤木著	6	多情佛心(前篇)	里見 淳著	3	笑ふ男・笑ふ女	十二谷義三郎著	5
小説集(下)	石川 藤木著	5	多情佛心(後篇)	里見 淳著	3	或る女(上卷)	有島 武郎著	4
評論感想集(上)	石川 藤木著	4	苦の世界	宇野 浩二著	3	或る女(下卷)	有島 武郎著	3
評論感想集(下)	石川 藤木著	4	山戀	宇野 浩二著	4	有島武郎書簡集	有島 武郎著	5
書簡集(上)	石川 藤木著	5	天保赤門黨	土師 清二著	5	神變麝香猫(上卷)	吉川 英治著	4
書簡集(下)附年譜	石川 藤木著	4	血染のパイプ	甲賀 三郎著	4	神變麝香猫(下卷)	吉川 英治著	3
選歌集	石川 藤木著	2	平妖傳(上卷)	佐藤 春夫著	4			
信綱文集	佐佐木 信綱著	2	平妖傳(下卷)	佐藤 春夫著	3			
三人	島崎 藤村著	3	都會の憂鬱	佐藤 春雄著	4			
海へ	島崎 藤村著	5	自選短篇集	林 房雄著	7			
出	島崎 藤村著	4	大暴風雨時代	前田河廣一郎著	5			
痴人の愛	谷崎潤一郎著	4	浅草紅團	川端 康成著	5			
愛すればこそ	谷崎潤一郎著	3	女性讚・生ける人形	片岡 鐵兵著	5			
愛なき人々	谷崎潤一郎著	3	喧嘩駕籠	長谷川 伸著	5			
草雙紙選	尾崎 久彌編	5	角兵衛物語	長谷川 伸著	5			

(以下續刊)



569  
142



